
死神達の恋歌 ～月の導き～

yatenyue

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神達の恋歌 ～月の導き～

【Nコード】

N1849Z

【作者名】

yatenyue

【あらすじ】

精霊術師のうち炎術師であった彼女・雛桜美月は、中学一年生13歳の春、5月に死んだ。

こちらは、ソールンサイティ尸魂界サイドです。

太陽の方が現世サイド。

で彼女の双子妹・雛桜卯月です。

力は最強、ですが精神的に弱め。

ととっても普通よりは強いです

過去の世界すべての前世の記憶を持ちます。

冬獅郎×ヒロインです。(私自身は、彼女がいなければ日夏派です)

月、太陽 共通プロローグ(前書き)

月、太陽両方共通です

月、太陽 共通プロローグ

私は

私の姉の美月は

あの日 死んだ

《零番隊隊長、兼元十番隊第三席副官補佐》

雛桜美月

M i t s u k i H i n a z a k u r a

最も辛き運命サダメを持つ者

「日番谷隊長には、桃ちゃんがいるし勘違い

すれ違い

「大好きっっ」

「消えて」

「・・・仕方ないよ。」

冬獅郎にとって、桃ちゃんは、姉か妹みたいなんだと思うから。」

垣間見たのは、柔らかな微笑

「絶対、ルキアは助けてあげるから。」

何度 別れてもなんで私は、恋をしてしまうんだろう？

大きな罪を私は、背負っているのに。

「・・・卯月が私に・・・？」
贖しよく罪ざい？

「よくも冬獅郎を藍染つ！！」

紅アカと赫アカと朱アカを纏い、

哀アイと愛アイとに満ちる

心優しき少女

「嘘・・・でしょ。卯月が消滅キエするなんて！！」

これが 罰 ？

哀しくも愛しい そして

残酷な 物語が 今紡がれる

それはまるで影のように

美月は満月キムツキのように。

《十番隊隊長》

日番谷冬獅郎

Toushiro Hitsugaya

氷と雪を操る炎の対。

美月の第一印象は、抜けたヤツ。

第2印象は、失礼なヤツ。

第3印象は、可愛いヤツだった。

気が着けば、美月を目で追っている自分がいた。

松本のヤツにからかわれても、否定できなかつた。

「俺は、お前が好きだ。」

あいつは、いつも自分のことより、他人のことばかり考えていた。

良く言えば、優しい。

だが、

悪く言えば、自分を軽く見ていた。

儂い。

強いが、弱い。

だからこそ思ったんだ。

護ってやりたいと。

今まであいつに会うまで、護りたいヤツは雛森だけだった。

俺にとって姉であり、妹であったから。

でも今は、できるならば美月の笑顔と心

そして欲張りかもしれないが、

雛森のことも護ってやりたい。

そう思うんだ。

「雛森に血イ流させたら、
俺がお前を殺す。」

血を流す雛森

涙を流す美月

血を流し倒れる俺にすがりつく美月

もっと、強くなりたい

消え行く意識の中

感じたのは、暖かな炎。

《水術師》

雛桜卯月

U d u k i = H i n a z a k u r a

血の呪いを受け継ぐ者

「私のせいだ。」

モリコロ
白黒の世界。

姉の残した詩。

いつだって、私の心を救うのは、

あの子 なんだ。

たくさん友達。

美月が死んで3年経っても、なお気にし続けた。

そして、

知らなかった周りの人々の思い。

嬉しかった。

でも、やっぱり逢いたいから。

ルキアもだけど、私の1番はやっぱり美月 なんだ。

そんな私が1番キライ。

皆傷だらけ。なのに私は無傷

美月は重傷。なのに私は護られ無傷。

「私が・・・消滅^{キエ}する？」 聞いた時

生きたいという思いと、

やっと死ねるといふ思い。 2つ の矛盾した思いが胸に満ちた。

絶望への序章が
始まる。

黒崎 一護

I c h i g o = K u r o s a k i

朽木 ルキア

R u k i a = K u c h i k i

井上 織姫

O r i h i m e = I n o u e

茶渡 泰虎

Y a s u t o r a = S a d o

有沢竜貴

T a t s u k i 〓 A r i s a w a

小島 水色

M i z u i r o 〓 K o j i m a

浅野 啓吾

K e i g o 〓 A s a n o

卯月の

理解者達

そして・・・

クインシー
《滅却師》

石田 雨竜

U r y u u 〓 I s h i d a

救済者

「自分だけが不幸・・・？笑わせんな」

そう君は一蹴したね。

今までの僕の価値観を

だから、僕も言わせてもらおう。

「罪？そんなの関係ないだろう。」

君は逃げているだけだ。」 君を傷つけるかもしれない でも、

何も関係がなかったからこそ救える

《零番隊二席兼元四番隊三席》

大道寺 皐月

S a t s u k i 〓 D a i d o u j i

共有者 優しき毒舌者

悟る者

あの子達は、本当に溜め込むのが好きですわね。

率直な優しさは、人を救うこともありますが、

逆にそれが苦しくなることだってあるんです。

本当に見て居られない、太陽と月

「馬鹿ですわね。そんなことで迷うなんて」

「あなたは、思う通りにやればいいんです。」

「少しは頼りなさい。馬鹿娘ども。」

言葉・・・
いつも、キツイ言葉である・・・不器用な

でもそれは常に真を指している。

全てを認めている者。

《零番隊四席兼元二番隊三席》

神無月 由宇

Yuu Kanaduki

共有者

愛を拒絶する者

愛は、破滅への序曲。

アタシは、そう思わなきゃやっていけなかった。

・・・自分の想いも分からず、愛を知らず、走り続ける者・・・

でもあの子達には、幸せになって欲しいから。

「アタシは、そういうの分かんないけど、あんたは違つてしょ。」

「まあ、いいけど」

「イツル、どうしたの？」

アタシは、自分の気持ちが

安堵の理由が

ワカラナイ

零番隊副隊長兼元二番隊副隊長

如月 海依

K i s a r a g i i K a i

共有者

信じようとする者

何度裏切られても、

人とは汚いものだも知っていても、

信じられようとし、

「どんなことがあつたつて俺は俺だから。碎蜂、お前だけは俺を信じて下さい。」 大切な人

「信じるに決まっているだろうが」

また、信じようとする。

・・・男とも女ともとれない、不思議な者・・・

俺はさ、人間って弱くて醜いものだって知っている。でも、それを知った上で、

俺は信じたいんだ。

それに、俺は、この手にあるもの全てを護りたい。

俺が私（＝女、弱さ）を棄てた代わりに。

美月達？

あいつらもだよ。

あいつらは、あの時から罪だ　って気にしている。

そんなの気にしないでいいのにな。

俺や臯月達が言っても聞きゃしない。

あいつらは、力は強い。

最強って言ってもいいくらいにな。（俺もだけど　自慢）

でも、心の一部分が酷く弱い。

失うことを恐れている。

だから俺はあいつらを支える。

ただそれだけだ。

そして

「私は、彼のために強くなるの。」

《零番隊七席兼元十二番隊三席》

神代　魅

M i r u = K a n e s i r o

改造された身体の持ち主

「たとえ私を思ってくれなくても
彼が幸せならそれでいいの」

「俺は、あいつのために強くなっただんだ。」

《零番隊六席兼元十一番隊四席》

須王 修宇

S y u u u = S u o u

強さを求める者

「俺が本当に思っているのは
誰なんだ？」

すれ違う2人

「僕は、あなたに会いたくて、死神になっただんです。」

《零番隊八席》

那智 葵

A o i = N a c h i

美月を尊敬する者

そして、血縁者

「僕に何ができるか

わかりませんが
僕は僕にできることをやるだけです」

「何もしないって、性に合わないし」

《六番隊三席》

佐野 明良

A k i r a = S a n o

美月と同じ血を持つ者

そして 崇拜者

「あなたはあなたにできることを
すればいいの。俺はあなたを否定しませんよ」

《零番隊五席兼元六番隊副隊長》

青木 輝

H i k a r u = A o k i

愛に裏切られ、心を美月に救われた者

そして

裏切り者

残されたのは 1枚の手紙

「だいつきらいな人間を

もう一度信じたいと

おもったのは
美月隊長のおかげです」

さあ紡がれ始めるは、愛しくも、残酷な物語。

プロローグ 始まりの時(前書き)

目の前には大虚^{メソス}

こんなことになるなんて

思いもしなかった

プロローグ 始まりの時

私はいつものように、

一護に虚が近付かないように、

一護から離れてからいつもは零の状態にしてある霊圧を

少し放出した。

いつもと違う所といったらいつも一緒の双子の妹、卯月がいない。

ただそれだけ。

いつものように雑魚だけかと思っていた。

なのに、突然の後ろからの攻撃…

私の腹を貫いていたのは

大虚の舌。

一体だけ混ざっていた、新種の霊圧を消すタイプの大虚だった。

私の魂は、あつという間に肉体から引き離されてしまった。
カラダ

(ちっ。今日に限ってっ。

卯月がいれば、苦勞せず気を引いてもらって

その隙に肉体に戻るのに…

卯月は狙われたりしてないよね。

因果の鎖はまだ切れてないし、

早く肉体へ…)

魂から10?離れた肉体へとまず行こうと

考えている間に、

視線が大虚にいつていたせいで

他の残っていた雑魚が

私の鎖を

踏みちぎれた。

（もうダメかな。

卯月には一護がイル。）

そう考え、霊体状態の私は朱い瞳を閉じようとした

その時、

強い冷気のような霊圧を肌で感じ、

閉じかけた眼を開けると

瞳に入ったのは

銀の髪をもつ死神。

その死神は一刀で大虚を倒し、周りの雑魚達を片付けていく。

全て片付け終えた彼が、私に近づき、言う。

「大丈夫か？」

「まったく、こんな所で霊圧を流すなんて何考えてるんだ、お前は　って人の話聞いてんのか！！」

「おいっ」

ほうけていた私は、正気を取り戻す。

不覚にも私はその死神に見とれていた。

私は赤くなつた顔を隠して答えた。

「はっはい」

はっきりいってマヌケ極まりない。

その死神ははあ…とため息をつくど、急に真剣な顔になって言う。

エメラルドのような翡翠色の瞳が私を一瞬硬直させる。

「お前、俺が見えるのに俺の服装見て、何も思わないんだな。」

俺以外にこんな服のヤツ見たことあるのか？」

私はこの言葉を聞いて

私の男に対する態度にしてはなんの警戒も持たず、
ありのままの事実を言った。

「へ、だって死神でしょ。」

ある程度霊圧あれば見えるの当たり前でしょ。」

彼は、呆れたような顔になって、
こう言った。

「死神が見える人間なんか聞いたことねえーよ
勝手に決め付けんな！」

私はその言葉を聞いてそういえばそうだった
と思った。

でも

「あ、周り一族とか見えるから忘れてた」

「そーかよ。(でも何故こんなに霊圧が低いんだ)

「お前名前は？」

霊圧を少ししか出していない状態のままでは彼の質問に答えた。

「私は 雛桜美月 です。あなたは？」

「雛桜か
俺の名前は日番谷冬獅郎だ」

それは
私という一人の人間の死という終わりと

新たな世界や思いの始まりだった。

しとしとと降るのは雨

それは遺された体を濡らし、

血を洗い流していった。

用語説明 精霊術師とはなど(前書き)

太陽と共通です

用語説明 精霊術師とはなど

精霊術師とは

精霊術師

精霊の力を借り、魔を滅ぼす者ら。

そもそも

約千年前5人の若者が、五行を司る神と誓約（自らの誓い）と契約（血を次ぐ者に力を）を結び、代々続いてきた。

その直系は

炎の精霊を操る炎術師の家系 / 雛桜家

地の精霊を操る地術師の家系 / 大道寺家

風の精霊を操る風術師の家系 / 如月家

雷の精霊を操る雷術師の家系 / 神無月家

水の精霊を操る水術師の家系 / 神名家

だったが、

80年ほど前に現世では

神名家は滅びた

また分家は無数にあるため直系の1人が、宗主として術師の上に立つ。

またそれぞれの属性の精霊の加護を受けているため

それぞれの属性のものでは影響を受けず、同じ術師でかつ実力が上の同属性は効く。

また 人それぞれ 周期も 月齢も 違うが力や霊力が不安定になる日が

炎術師だと、満月周辺

水術師だと、新月周辺

地術師だと、満月寄りの半月

風術師だと、三日月

雷術師だと、半月

力が 弱すぎる人と強すぎる人が頻度が多い

まあ 多くても1年に1、2度

超越者とは・・・

あらゆる次元において神に認められ力を借り受けることを認められたをさす。

その数は今この世界に片手しか存在していない

美月の生家、雛桜家ははるか1000年ほど昔、神獣・朱雀と契約した超越者の血を継ぐ家系である。

いやそれだけではない、ほかの4家、

水の神名家は、神獣・玄武との

地の大道寺家は、神獣・白虎との

雷の神無月家は、神獣・青龍との

風の如月家は、神獣・黄龍との

超越者の血を引く。

それを一族は始祖と呼んでいる（名前は伝わっていないが、5人

は知っている)

精霊術師の家系の戸籍について

はっきりいって作られています、関係者以外閲覧不可だし
たとえ天皇でも見ることは叶いません。

だから

死後であろうと気づかれずに仕事ができるのです

雛桜家

炎術師直系

一番直系に近い分家としては佐野家があげられる。

炎だけは

明確に等級づけされていて普通の炎>黄金の炎(浄化の炎)>神炎

神炎とは、

自らの霊気を織り込んだ最高峰の炎で

いままでには美月を入れても10に満たない。

美月の神炎は

朱金色で

太陽のようなことから

紅炎またの名をプロミネンスと呼んでいる。

神名家

影の五代天皇家の一つ。

(他は炎術師の雛桜、雷術師の神無月、地術師の大道寺、風術師の如月)

水術師の本家。

80年程前現世では滅びた。尺魂界では元四大貴族で33年前滅びたとされる。

代々零番隊隊長を宗主が勤める。

美月達の母が元零番隊隊長神名葉月

高確率で双子が生まれ、二人は引き離されて育てられる。

というのも、神名家はある呪いを受け継ぎ、その呪いに対抗するために、術を用い、双子の片方が呪いを受け継ぐようにした。

二人の母である葉月は、二つにわかれた受精卵が結合し1人で生まれてきたので呪いを受け継いでいた。

呪いや神名家に伝わる刀については未来編最終ページにて

瞳の色について

炎術師の名家「雛桜」及び分家では、一番強いのが濃い朱。で暖色系が多く、橙や赤紫、ピンクなどで占められている。

雷術師の名家「神無月」及び分家では、一番強い力の持ち主は金、他は明るい茶色や、オレンジ等がもっぱら

水術師の名家「神名」及び分家では、藍色もしくは紺色で、藍色のほうが強力。濃い青系です。

風術師の名家「如月」他分家では、水色が一番力が強いほうで、より透き通ったほうが力が強い。ほかは薄い灰色や茶色

地術師の名家「大道寺」および分家は、濃い茶色やオレンジ、少ないが緑である。

緑が一番強いといわれている

葬儀の違い

精霊術師の家系は葬儀屋とかは呼ばないし、お墓も作りません。

一族ごとに決まっけていて

自らの仕える神の御元へと還るため

風術師は本家地下にある風の力が溢れる微生物の一匹もない部屋に死体が朽ちるまで（風化）

地術師は本家地下に半分弱埋められて、地に還るまで水術師と同じ一族のものに作られた氷の中へ葬られ

雷術師は一族が絶えず、力を注いだ雷の間で

炎術師は本家地下の炎の間で

どの葬方も肉体に宿る血の力がなくなるまで死したときそのまま腐敗もしない

（どこも微生物がないし存在できない）のため1ヶ月でなくなる人もいるし

逆に十数年かかる人もいるちなみに明良を含めた美月達は未だ変化一つない

多分明良は分家ながら強かったのあと十年は美月達は歴代最高だし、前世に始祖がいるので

数百年単位必要かもというかいる。ちなみに始祖はまだ残ってる。

だって仮に火葬するとして炎術師なら死んですぐは燃えないし、水術師なら燻るし、地術師は足が地についていたらすぐ燃えても治るし、風術師はなんかありえないことに空気の膜で覆われるし

困らないの雷術師のみ

ちよーつと不自然に静電気発生するけど（全然大丈夫じゃないってー）

単語説明 出てくるたび更新予定

怨霊

ギリギリ虚ではない

かなりのレベルになると自分自身が虚になるのを

無意識に避けている

また魂葬も簡単でなく、下手な虚より達がわるい

が 虚のようにリーダーに反応がないため

100% 生者の術師等に倒される。

登場人物 その1 月ヒロイン 雛桜 美月(前書き)

イラストはサイト内にあります ここにはありません

登場人物 その1 月ヒロイン 雛桜 美月

原作の年（一護が高一）は2007年とする

雛桜美月

1991・4・3生まれ

享年13歳

炎術師の家系の直系

雛桜家の長女であり、卯月の双子の姉。

13歳の5月末、虚との戦闘で死亡

その時 十番隊隊長日番谷冬獅郎に助けられる

その後すぐ斬魄刀を生み出し、死神として働くことになる。

その時は十番隊三席。

その後同年12月、卍解が使えることがばれ

零番隊（正式名御廷十三隊直属特別部隊零番隊）隊長となる

霊気の色：朱金

生前の髪の色：黒

今の髪の色：朱

瞳の色：朱

身長：145?

体重：30?

血液型：A型

相手：日番谷冬獅郎

詳しいことは第四章で話すが前世の記憶があり

その記憶のためか、過度に周りが傷付くの良しとしない

鋼や狩人（同姓同名）、復活（水無月楓）連載でてくる主人公は、
パラレルワールドの彼女。

詳しい前世はかなしき物語で

またパラレルワールドの自分との記憶は共有している

前世の罪で

時間と空間の扉の守護者

になっている

斬魄刀

? 朱夏シユカ

始解：炎よ散れ朱夏

刀が炎を纏い、炎を操る

卍解：卍解カリンズザク火輪朱雀

七星の力を使う。

朱金の炎を放つ大きな朱雀が現れる

鬼宿タマホメ：レーザー状の炎（黄色）

柳宿ヌリコ：炎の球

星宿ホトトリ：炎の刀

翼宿タスキ：鞭状の炎

軫宿^{ミツカケ}：幻炎（紫）

井宿^{チチリ}：盾の炎（白）

張宿^{チリコ}：空間を断つ炎（青白）

元々は美月の守護精霊

具現化：緋色の中国風の服を着た美月によく似た10程朱髪朱瞳（美月より薄い）の少女で口調が古式。

中国で南を守護するという神・朱雀。

炎を司り、雛桜家に力を与えた張本人。

「我はお主の言葉に従う。ただそれだけだ」

つかは羽のような形。

卯月の斬魄刀藍珠の対

? 癒宇^{イウ}

始解：癒せ、癒宇

青白い光で癒す。内部を治す時、刺した方が治る。

卍解：○？（里）以内の全ての人を治せ、卍解治癒空間

完全治すには長時間必要

薄い朱い霧にその空間が覆われる。

具現化：白に近い銀髪に碧瞳の女で背中に片翼

元戦いと癒しと愛を司る大天使。

「もし自分が死ねば皆が助かるなら貴女はどうしますか？」

つかがない懐サイズの刀

持つ所には「癒」の字

サブ主人公その2の皐月の斬魄刀宇紀癒の対

？ 刹那^{セツナ}

始解：血に飢える、刹那

刀身が血色に染まる

キーワード「切り刻め」ということで刺した対象を木っ端みじんに

卍解：血を浴び、悪夢を見せろ、卍解永遠ノ悪夢

昏い空間に傷付けた敵を閉じ込め、精神が壊れる

もしくは美月の許可を得るまで出られない

両刃の剣で、揺るぎない殺す覚悟を持たないと

美月自身が傷付く。

具現化：黒髪緋瞳の男で全身黒づくめ。

ひどく好戦的で戦闘狂に近い

左目に大きな傷跡がある

「人を殺す覚悟お前にあるか？」

黒の柄から白い布がでている。

朱夏以上斬月未満の長さ

卯月の斬魄刀琥珀の対で、神名家に伝わる宝剣の1つ

その他

誰にでも愛される子恋愛ごとには涙もろい。

しかし、意志が強く、喜怒哀楽の激しい子。

しかし自分の恋にはうとい。

いくらつらい目に遭おうとも人を愛せる。

が若干男が苦手。(えっ)

(これは本人達しか知らないことだが、異母兄・響「父の前妻の子」により、小学4年から6年の中頃まで性的虐待を受けていたしかも兄1人だけではない)

彼女本人もショックと兄の術で忘れていたが、心の奥底や体が覚えているし、日記で見知っている。

10までは前世の記憶はうっすらとだけだったが、皮肉にも上をきっかけに全てを思い出す。

IQ300以上の持ち主で
アメリカのハーバード大学の理数科と医学部の終了資格をわずか6歳の時半年で取っている。

イメージは赤薔薇か桜。

また12までピアニスト兼作詞作曲家”ナナ”として名を挙げる

左手にガーネットでできたブレスエットをしていて
これが霊圧制御装置
8割を封じ込める

だが残り2割の状態でも
隊長格の1・2倍の霊圧

つまり

全霊圧は隊長格6人分
しかし霊圧制御装置をつける原因は
体が耐えられないため。

また、完全に霊圧を解放すると
額に朱雀の刻印が浮かび上がる。

登場人物 その2 太陽ヒロイン 雛桜 卯月

原作の年（一護が高一）は2007年とする

雛桜卯月

1991.4.4生まれ

現在16（原作初期時） 18（死神代行消失編）

空座高校1年3組 3年（石田と同じクラス）

一護とはクラスメイトで小学校からの友人

様々な武道大会で優勝していて、

一護やチャドより

100倍強い。（死神前段階で）

雛桜家の次女で次期宗主。（20代め）

月ヒロイン美月の双子の妹

姉が死んだのは自分のせいだという自責の念を抱き、また魂の無事を信じたいと思っている

霊気の色：藍碧の霊気

髪の色：（通常）黒色

（霊体）藍色

瞳の色：藍色の瞳だがカラーコンタクトで茶色にしている

身長：160？

体重：40？

血液型：A型

相手：石田雨竜

美月、サブ主人公3人組とかかわりの深い切っても切れない前世の絆を持つがまだその記憶を取り戻していなくて

第二章中

少しずつ思い出していく。

パラレルワールドの記憶の共有は完全に思い出した後

霊界の扉の守護者

斬魄刀

?
アイジュ
藍珠

始解：水氷に舞え、藍珠

水のように様々な武器に変化する

卍解：卍解玄武水氷陣珠

水の玄武が出現して、水の球を操る

凍結（水色）

变幻自在（透明）

癒し（白）

幻（緑）

溶解（黄）

もちろん普通の水の球あり

卯月の現守護精霊

具現化

藍色の中国風の服を着た卯月に顔立ちのよく似た藍髪藍瞳少女

中国で北を守護する神・玄武。

神名家に力を授けた張本人やはり古式な口調

「お主は一体どうしたいのじゃ」

外見

つかが雨粒の形

長さは朱夏と同じくらい

美月の斬魄刀：朱夏と対である

?琥珀

始解卍解ともに不明　まだきめてない（決め次第更新）

具現化

ぴちぴちピッチのミケルそのまんま

蒼翠とも彼女に言われる。

碧銀の髪に紫の瞳

外見は刹那と正反対で白い刀身柄で柄からでる布は黒
長さは小太刀コダチ

美月の斬魄刀：刹那と対である

その他

裏表がある子。

（4人よりも）自分のことはどうでもよく、自分のせいで誰かが傷つくのを恐れる。

恋愛対象として男はあまり好きではなく、（女が好きと言うわけではなし）ナンパ男への対応が1番酷い。

完全に思い出すのは、2章中だったりする。

IQ200

ハーバード大学なかつたらごめんなさい体育科をトップで卒業かつ体育の国際教員免許を8

歳で半年取った。

美月とともにコンクールで何度も優勝。

”ナナ”の双子の妹”ナミ”ヴァイオリニストで歌も少々。

現在は歌手を波音^{ハツネ}として。

イメージは水仙か蓮

蒼いサファイアでできたブレスレットと髪飾りをつけていて
それは霊圧制御装置。

これにより8割強の霊圧が封じ込められている

完全に封じた霊圧を解放すると

右手の甲に玄武の刻印が浮かび上がる

紹介はまだまだ続く… 長い

登場人物 その3 サブ主人公 3人衆（前書き）

姉御肌で、胸でかめな、派手系美人なサブ主人公1

毒舌敬語系、大和撫子系なサブ主人公2

兄貴系中性的美人なサブ主人公3
です。

登場人物 その3 サブ主人公 3人衆

サブ主人公その1

神無月由宇

享年15

1987・10・10生まれ

元三番隊三席
現零番隊四席

姐御肌な性格で
男女にもてる。

霊気の色：黄色がかった白金・金色

髪の色：（今）金色
（生前）金茶

瞳の色：金

身長：165?

体重：45kg

血液型：O型

相手：吉良イズル

主人公と同じ

死んだとき前世を全て思いだした

魔界の扉の守護者

斬魄刀

?雷霸

始解：雷をあげる、雷霸

外見変化せず、雷を操る

卍解：四方よりまじわれ、卍解青龍雷輪

青白い電気をまとい金の光を放つ青龍が現れる
始解のパワーアップ

元由宇の守護精霊

具現化

金髪金瞳の黄色を基本にしたミニスカ中華服を着た10程の由宇に似た少女

中国で東を守護する神・青龍

「いこうかの由宇」

迅雷の方が短い

迅雷とは対

?迅雷

始解：集え、迅雷

外見変化なし、雷覇より弱く、微妙な調節にたけている。

卍解：卍解紫電一閃

雷をまとう鳥雷鳥が現れ、その羽根は当たるだけで大ダメージ。

始解のパワーアップ

由宇の元守護精霊

元を正せば、異母兄・日向陽ひゅうが ひなたの守護精霊。

具現化

20くらいに見える蒼銀色の髪に金色の瞳の男性。

「ちやっちやと終わらせよう主」

雷覇とは対

雷覇の方が長い

その他

公私を分けている

零番隊の苦勞人。

イメージは黄薔薇か向日葵。

愛って何かわかっていながら心がそれを認めない

天才若手女優”唯”。

12〜25までの役を10の時から。

出演したものはどれも好評

話題の名作”朧月夜”での幽霊”アリサ”役や

”天使のつばさ”では第一シリーズでは妹の聖良、第二シリーズでは姉の怜良等5年前のデビュー当初から
天才子役の名も期待の若手の名も様々な声も総なめになっている。

政略結婚な両親で父親も母親も愛人作っているし、夜遊びはするは、
な最低ども

兄弟仲は最悪

全員片親違い。

名字は一緒だから、怪しまれないよう別々の学校に通ってたけどさ
名前なんて全然気にしなくてもいいよ

一番年上なのが12歳も年上の異母兄・充^{ミツル}

次に10年上の異母姉・艶香^{ヨツカ}

つづいて

5つ上の双子の異母兄、実と旬^{ミフル シュン}

でこの後に生まれたのが

由宇

由宇だけがこの夫婦本来の子

悲慘
由宇が生まれた後はもうこの夫婦離婚してないだけでももう悲慘

上の兄妹みんな母親違う

で下に

2歳下の異兄妹・愛

4歳下の異兄妹・恋

6歳下の異母妹・絵依

6歳下の異兄妹・憂^{ウイ}

8歳下の異母弟・昭夫^{アキオ}

9歳下の異父弟・治

10歳下の異母弟・昭継

12歳下の異父弟・健

母親が生んだのは全員認知せざる得なかったけど、

父親はそこらじゅうで種撒き散らしてたらしい(下品ですまん)

霊圧制御装置は、シルバーアクセの
ブレスエイト
左手につけていて、完全霊圧解放すると、左腕に青龍が浮かび上がる。

サブ主人公その2

大道寺 皇月

享年16

1987・5・5生まれ

元四番隊三席

現零番隊三席

毒舌腹黒ですか

言うことは正しく、実は優しいお姉様

霊気の色：白がかった緑

髪の色：（今）碧

（生前）茶

瞳の色：緑

身長：160？

体重：43kg

血液型：B型

相手：檜佐木 修兵

主人公と同じ

しんだ時に思い出した

天界の扉の守護者

斬魄刀

？花音

始解：惑わせ、花音

卍解：咲き誇れ、幻音を聞かせよ、うつつね卍解白虎百花繚乱
土の力や植物の力を使う

花の香りを使い、さまざまな効果のある香りや、薬を作ること
も可能。

皐月の元守護精霊。

具現化

碧瞳碧髪の皐月にそっくりの外見だが毒舌は控えめな10程の少女。

中国で西を守護する神・白虎。

「何してるのさっさと行きますよ皐月」

柄に飾りひもがついていて始解の時緑にかわる。

海依の斬魂刀：地生の対

? 宇紀癒

始解：力を与えよ、宇紀癒

卍解：命の息吹を、卍解昇天癒紀

ともに癒宇と違い、体の傷を治すのではなく、霊力を回復させる。

(自分の霊力を相手のに変換)

卍解では、満遍なくだが、1人1人に対しては、始解のパワーより
ダウン気味

具現化

黒髪碧瞳の癒宇にそっくりな少年。

同じく片翼を持ち、元癒しを司り天界の番人補佐であった天使（
皐月の部下）

「また貴女と戦えるなんて光栄です皐月様」

西洋風の普通のサイズの刀

癒宇の対

その他

腹黒、毒舌、敬語キャラ。

だが優しく、少し弱い。大人。

人は汚いものだと悟っている。

間違いなく男を尻に引くタイプ。

美月達のお姉さんかお母さんみたいなの。

冷静に見えるが、激情家

イメージ大樹か薔薇の棘

裁縫等がとても上手く、料理に至っては若干12歳でプロの料理人の資格を取り、

和洋中伊等を幅広く着手してきてまた日本一の高級旅館>梓弓<の女将：月夜として働いていた。

霊圧制御装置は首の十字のネックレス

完全霊圧解放すると、胸元に白虎が浮かび上がる。

サブ主人公その3

如月海依

享年15

1988・2・2生まれ

元二番隊副隊長

現零番隊副隊長

男前で中性的

髪が長いのに女物以外着ていると男に間違われる

もしくはどっちと言われる

靈気の色：碧や水色がかった銀

髪の色：（今）銀

（生前）黒

瞳の色：水色

身長：170？

体重：47kg

血液型：AB型

相手：碎蜂

主人公と同じ

しんだ時に思い出した

妖精界の扉の守護者

斬魄刀

？風華

始解：風よ我が声に応えよ、風華

うすく刀身に龍が浮き出る

卍解：黄龍迅風華遠

水色で銀の光を放つ黄龍が現れる

元海依の風の守護精霊。

具現化

海依にそっくりだがこっちの方が若干女らしい。

銀髪水色の瞳で中国服着用。

中国で中央を守護する神・黄龍。

「行こう主様」

風車のようなつかの形

?地生

始解：地の力を我に、地生

卍解：地竜五行地ノ章

土色の竜が現れる

元海依の地の守護精霊

具現化

茶髪茶瞳の筋骨隆々とした男

「さっさとしろ海依」

小太刀ほどの刀

花音の対

その他

恋愛に関して男大嫌い。

というより前世は男女すごい半々なせいで性への認識が薄い。

イメージは白か蒼か水色の薔薇。

またその容姿をいかしたモデルで主に男装モデルと変幻自在に声を操る凄腕のベテラン声優として、

モデルは12くらいから声優は8くらいから活動している。仕事名は戒^{カイ}。

5歳年下の異母弟・風がいる。

術師の本家大道寺家の娘と如月家の現党主の間に生まれた。

珍しい術者同士のハーフ。

後妻に嫌われてた。

左手人さし指につけている指輪が霊圧制御装置

完全霊圧解放すると、黄龍が左手の甲に浮き出る。

5 人衆についてと零番隊（前書き）

サブ主人公三人衆と双子の共通点とか、零番隊について… 等々

5 人衆についてと零番隊

霊圧制御装置ついて

つかわれている宝石は

元々は霊石と化した真珠

術師の属性により、宝石に変わる

炎 ガーネット

水 蒼いサファイア

雷 トパーズ

地 ペリドット

風 アクアマリン

強い力を封じ込めるために使い、通常力の制御できない幼児のころからつける。

が5人の場合は

普通の人「一族分家」が玉ひとつ

普通の直系3〜4で完全に押さえ込めるが

10この玉つけても

8割までしか封じ込められなかった。

「これ以上附加できない」

10までなら

玉を濃縮し1こ分の大きさにできる。

そんな5人の

共通点

- ・自らを突き通す
 - ・心に傷・過去を乗り越えている
 - ・裏切り〃なくならない
- しかしなくなつてほしい。
- ・肌でなく魂に刻まれた刻印

ヒロイン達の設定+

義骸を使わなくても、霊圧の調整や構成で実体化できる。

(死神ヒロイン達やオリキャラはもちろん、灰側ヒロイン、魔法側ヒロインも、)

イコール

義魂丸を持ち歩いてもない

語学力について

日本語以外に

海依や皇月、由宇ができるのは アメリカ英語、中国語、フランス語
卯月はそれ + ドイツ語

美月は卯月 + イタリア語、イギリス英語

である。

(「美月は、依、独、英、米、日、中、仏の七か国語しゃべれて、
卯月は - 伊、英
あと3人は - 独である」)

零番隊

正式名御廷十三隊直属特別部隊

零番隊^{レイ}

隊花 薔薇

意味「うつろい行くもの

様々な色^{シキ}」

隊長羽織(裏)

紅^{クレナイ}

副隊長章のようなものが

隊長以外全員にある。

く五席まで後に 四席 金

後の席官銀

で出来ている

零番隊的虚ランク

S × 5 破面ゼロナンバー1く7

S × 4 上の8く15

S × 3 上の16く25

破面1く5エスパーダ

ヴァストローデ

S × 2 6以降のエスパーダ

ヴァストローデ

S それ以外のアランカル

AA アジューカス

A ギリアン 巨大虚

BCD 普通虚

死神でいうと

隊長格は全力でS × 3

零番隊の美月・海依・臯月・由宇は全力でS × 5と互角程度。
副隊長は隊によるがSS (恋次) からAA です。

一角さんはSS

かなー

ちなみに

零番隊の5席以下はSSS弱

六番隊三席はSSS弱

で精神状態に大いに影響される

よくも悪くも感情的な面がかかわる

なお等間隔空くのでなく

SSとSSSSやSSSSとSSSSではもう別次元である。

王族特務は零ゼロから参番隊まである

ゼロはレイとほとんどメンバー同じ

壹番隊 - 隊長山吹 空羽クウハ

副隊長：青木輝

貳番隊 - 隊長三上 馨カオル

参番隊 - 隊長佐野 斎イツキ

原作50年前の佐野家当主

輝以外いずれも原作時から今まで一緒

(まだ、名前しか決めていませんが

詳細が決まれば

つけたします、次話に)

他オリジナルキャラ

オリジナルキャラ

?青野 輝

享年17

死因 親による虐待

虐待理由 異能

家族（生前の）両親、妹（14下の）

元六番隊副隊長兼現零番隊五席
恋人に裏切られた過去をもつ。

心を美月に

体を藍染に救われた過去を持つ

美月の願いで空座町で、高校生として潜入

二章で彼女が選ぶのは……………

藍染？それとも美月？

身長：155？

体重：45？

血液型：A型

誕生日：1/2

髪の色：黒 瞳の色：オレンジ

霊気の色：オレンジ

斬魄刀

言霊

始解：虚を現に、ウツロウツツ 現を虚に、ウツロウツロ 言霊

瞳がオレンジから金に変わる

効力範囲は刀を中心に半径50？

卍解 夢幻ノ詞 △ゲンのコトバ

どんな言霊を現実にする

また効力範囲は半径2？

だが、理に関する ことは

代価を必要とする

具現化

10？程の妖精で白髪黒瞳。

「ちよつとーしっかりしてよ輝私はあなたが何を選んでも従うから」

？須王 修宇

元十一番隊四席

現零番隊六席

第三章で五席に

見た目 20前後

髪の色：灰色 アッシュユ

瞳の色：黒色

身長：175？

血液型：B型

体重：？

誕生日：？だから初めて魅と会った日である3/10

靈気の色：白

冬獅郎とは同期で、まあまあ良好な関係だったのだがあることで険悪に

草冠とも知り合いでいつも一位日番谷 二位 須王 三位 草冠

魅とは幼なじみ

更木出身

斬魄刀

光神

始解：貫け、光神

光属性なので、太陽が出ている時最も力を発揮

卍解は魅と合体卍解

?^{カミシロ}神代 魅

元十二番隊三席

現零番隊七席

第三章で六席に

見た目：20前後

髪の色：栗色

瞳の色：焦げ茶色

身長：165？

体重：？

血液型：O型

誕生日：修宇と同じ

霊気の色：黒

桃達と同期

一回生で始解を習得

更木出身で、修宇とあって世界に色がついた

修宇が好き

マッドサイエンテストが大嫌い

整形で見えなくしているがおでこに大きな傷。

マユリの肉体強化の手術をうけた。

そのため、身体能力は隊長格だが、体内などがついていかず、吐血
することがある。

腕の傷は1回生の時の実習中虚に。

チョーカーをいつも外さないのは下の手術痕を隠すため。左目視力
が極端になく、

流魂街時代から0・2と悪かったが投薬の影響で0・05にそのた
め戦闘時眼帯をつける。右目は3・0

零番隊章は腰に巻き付けていて、改造死覇装。

阿散井達と同期

斬魂刀

闇王

始解：全てをおおいつくせ、闇王
同様に月がでて辺りが闇で覆われている時最も力を発揮

合体卍解

卍解「闇夜ノ月光紳王」

? 那智 葵

零番隊八席

第三章で七席に

見た目 1 2、3

髪の色：薄い亜麻色

瞳の色：茶色

身長：150?

体重：?

血液型：AB型

誕生日：7/20

霊気の色：蒼

まだまだ新人の死神

明良とは同期。

流魂街にいたころ三席時代の美月に様々なことを学ぶ。
そのため尊敬の念をもつ

実は 雛桜家の者らしいが生まれてすぐ死亡したため術はなにひとつ使えない

血筋上 ○○の兄に当たる

斬魄刀

蒼炎

始解：炎く熱するものを全て無にかえせ、蒼炎

刀身を蒼い炎が覆う

氷水く蒼き力を蒼炎

刀の蒼がいつそう色濃くなる二つ同時に使うのは不可

卍解：蒼碧炎氷ソウヘキエンヒョウ

水晶でできたような翼を持つ龍。天龍

中で炎が揺らぐので模様が動くように見える

具現化

藍に近い紫色の髪に赤紫色の瞳の三十路まじかに見える男性。美形。
実は蒼炎使い・雛桜慧。

水術師と炎術師のハーフ

「こやつは一応雛桜直系だぞ。産まれる前に死んだがのう」

? 佐野 明良

六番隊三席

享年：13

髪の色：赤茶

瞳の色：明るい茶色いや、桃色

薄いオレンジにも見える便宜上桃色で

身長：153?

誕生日：8/23

血液型：AB

霊気の色：薄い赤 桃色

雛桜家の分家・佐野家の次男

美月、卯月、留依のはとこに当たる。

元美月の婚約者

美月を尊敬していて、初恋は留依だったりする

毒舌マシングントークの持ち主で、

顔立ちはそこらの女の子より愛らしい

初対面は十中八九女に間違える・・・

生前はサッカー部キャプテンであり、U-14に所属していた海依、
皐月、由宇、風と同じく

聖クロス学園に通っていて頭もいいのでSAだった

サッカーのポジションはFW

これはネタバレだが
この世界のホイッスルの椎名翼である

斬魄刀

陽翠

始解：紅に染まり踊れ炎よ、陽翠
形状変化なし。

目に見えない小さな炎を起点に発する色は金と普通の深紅

卍解：太陽炎輪翠彰

ニチリンエンリンスイショウ

いくつもの廻る炎の輪

核が雪の結晶のような形の炎。

これが壊されない限り再生可能。

具現化

一見不良の金髪赤瞳野郎。 関西弁

元守護精霊らしい

「おいおいすっかりしてくれーな姫さん」 でそのあと明良はいつ

もこう切れる「目が腐ったのかな、それとも頭かなこの馬鹿が」

「そんなことゆったって姫さんは姫さんやかわいいかわいいの」

?如月 風

サブ主人公3 如月 海依の異母兄弟にあたる。

如月家次期当主

本人は姉を大変したっていたが：

周りはそれを良しとしなかった

主に女モデルとして”宵”という名で活躍している。
また姉同様声優もやっている。

髪の色：黒

瞳の色：水色

誕生日：1992.12.10

身長：155

未来は170

霊気の色：水色

血液型：A

風術師で如月の次期当主

? 雛桜 留依

美月や卯月の従妹にあたり、
明良のはとくに当たる

敬語をよくつかい、おしとやか。
おかつぱ頭が印象的。

いちおう声優で”朱炎”の名をつかう。

髪の色：黒

瞳の色：赤だが薄い。濃いピンク

誕生日：1994.6.12

身長：150

血液型：A

霊気の色：赤紫

紳炎は使えない

。サブのサブ かも

?日向ヒユウガ陽ヒナタ

神無月由宇の唯一兄と認められた異母兄

8歳上。

秋生まれ

髪の色：薄い茶色

瞳の色：黄色

約8年前死亡

享年16歳

誕生日：1979・11・15

血液型：O型

身長：170cm

体重：60kg

自らの魂の片割れである守護精霊を妹に託したため、
斬魄刀を持っていない。

流魂街にいる。

冬獅郎を拾ったおばあちゃんと暮らしている

霊力があり、結界・縛術・鬼道・その他の術は使えるし、弱かった体は、強くなっている

今のところ死神になるつもりはない。

?八城 初音

元由宇達のクラスメイトで妹のような存在
見た目16、7歳

葵達のクラスメイト。
茶髪茶目の可愛い系

原作時点では、四回生。

?煌^{こう} 未姫^{みぎ}

身長：160cm

体重：45kg

中国人と日本人のハーフ

冬獅郎や修宇と同時入学で、女名だが男

生前病弱だったため、色白。

対人関係がダメダメ

でも実力はあったようで、現在七番隊5席

見た目は16、7。

紺色の髪に、漆黒の瞳

第一話 我が名（前書き）

私は死んで死神となった。

心残りが無いといえは嘘となる。

それでも、別れてしまった道が再び交わると信じて、私は歩き続ける。

愛する人と仲間達と共に

仲間を守って死んで幸せとかそういうことは、考えない。

共に助かる可能性がどんなに低くても、

0%じゃない限り、

また自分がどれだけ傷ついても絶対に共に助かって見せる

こんな私を大切にしてくれる人のために

第一話 我が名

私はその死神・日番谷 冬獅郎に魂葬された。

第一話 我が名

「ここが……ソールンサイティ―尸魂界。」
なんか、あっちの方から大きな霊圧をいくつも感じる。
なんかとても懐かしい感じもする。」

そう自分の世界に没頭しながら
順番待ちを通り越し勝手に中へと
自分の感じるままに歩いて行った

霊圧を感じるほうにと。

だが、私は急にとまった。
なんとなく嫌な自分に害を及ぼすタイプの霊圧を感じたから。
私はその辺にあった石を拾って、嫌な感じのする所に投げた。

すると下から大きな壁が現れた。
すべてを拒絶するかのようなオーラを放つ壁が…

「やっぱりね。」

外敵を退けるためのものの類ね…

でもこの向こうっていったい？

守らなければいけないものがあるわけ？

それにこの霊圧…」

冷静に物事を推察する私こと雛桜美月。

「そこは瀟^{セイレイテイ}霊廷だよ。」

突然の声に振り向くと、そこには少しわかめのおじさん。

「あなた…誰ですか？」

私が気配に気付けなかったかなりの手練と見える人物

「そりゃあ失礼。僕は享楽春水という者だ。」

それとは裏腹に飄々として軽薄そうに見えるその男が着ているのは、
さきほどは気付かなかったが、

派手な女物の上着の下にあるものは、死神の着る黒い着物・死覇装。
それをみて少しは警戒心を解く。

全くの正体不明男ではなくなったから。

でも、私は、彼女は本能的な部分でまだ警戒していた。

「あなた、その服死神ね」

頭が痛い

なぜかくらくらする

「そうだよ。

僕…

私の意識はブラックアウトした。

おそらくは

生前の記憶を全く失わずに

この尸魂界にきたからも原因だった。

ドサッ

美月は倒れ

それを瞬歩でよった享樂が支える。

そしてこう疑問を空へと溶かした。

「ちよつと君っ

気を失つてるよ

対して靈圧があるわけじゃないのに

靈圧をここまで正確に感じ取れるなんて

いったい何者なんだい」

そういいつつ

御廷十三隊八番隊隊長である彼は

彼女を抱え、瀨靈廷の中へと入って行った。

IN 八番隊隊主室

「隊長っ

どこにサボって……

誰ですかその子

まさかさらってきたんじゃないですよね」

真面目そうな眼鏡をかけた20代半ば程に見える女性の死神。

「七緒ちゃん ただいまあ

この子？

なんか霊圧ほとんどないのに

瀟霊廷の外から霊圧を感じるとか言ってる

話してたら急に倒れちゃったから連れてきちゃった」

「何が連れて来ちゃったですか

この子の親御（義理）さんが心配したらどうするんですっ」

会話を聞いているだけで

享楽さんのいい加減さ

七緒さんの苦勞がにじんでいる。

「仕方ありません

目を覚ますまでここにおいておいてかまいません。

そのかわり、後できっちり総隊長に事情を説明すること。

そしてサボった分の仕事してくださいね」

冷たい眼差しで享楽をにらみつけた。

「ええ」

七緒ちゃん」

はっきりいって情けないことこの上ない。

こうして享楽隊長は七緒さんの言つとおり

美月を別室において

仕事をすることになったのであった…。

美月がいたのは

朱金色の炎につつまれた空間だった。

「……？」

誰もいないその空間でその疑問に答えた声があった。

『……はお主の心の世界じゃ。』

「この声は…朱夏？なんで私は死んだのに」

それは美月にとって、大事な相棒の声

死んだ以上

もうしばらくは聞くことがないと思っていた声

『……そっじゃ』

しかし、この世界では、精霊術師としてのお主の守護精霊として存在しているのではなく、

死神としてのお主の相棒・斬魄刀として存在し共に戦う。

だが、お主の斬魄刀は我だけではない。

あと2本ある。その名前をみつけるのじゃ』

私は嬉しかった。

また再び朱夏と戦えることが

ともにいれることが

”いままで”で”彼女たち”の次に永く一緒にいたのは、まぎれもない彼女・朱夏だったから。

それが私を再び戦いの中に誘うものだとしても…

それに無力で護れないことがどんなに恐ろしいか彼女は

”今まで”にずっと”体験”してきたから

「わかった、朱夏。見つけてやろうじゃない」

私の肯定の返事に対して朱夏は

『よし、ならば…』

朱夏の人型があらわれた。

緋色の中国風の服を着た美月によく似た

10程美月より薄い朱髪朱瞳の少女。

後ろには2人ほどいるが、見えない。

『まず我はとつくにお主を認めておる。

”あの時”からのう。

卍解もできそうじゃな。

卍解はおいおいまた時間のあるときの夢の中でもなんでも教えるとして、

とりあえず、始解の時は、 炎よ散れ朱夏 の言霊を言え』

卍解？

始解？

はっきりいって死神のことは知る必要もなかったから、

正直に朱夏に尋ねた。

「卍解？始解？なにそれ」

すると不思議そうに

『知らなかったのか？
説明しなかったか？』

おいおい
いくら私でもしんだ後必要になるかもわからないことには、手を出さないよ

たしかに雑学知識や専門知識は豊富に持つてるが、

とつかこんな早く死ぬなんておもわなかったしねえというふうな思考のすえ

「朱夏私をなんだと思ってるわけ？

私は”万能”じゃないんだからね」

と言っただった。

『斬魄刀には、2つの解放があり、最初の解放を始解、もう1つを卍解というのじゃ。』

一般的に、卍解は始解の5〜10倍の力が出せるのじゃ。

じゃから使えるものは本当に少ない。

自分の斬魄刀の名前すら知らない者も多いようじゃからな。

のため、死神の隊長になる第一条件でもある。

力が使えないより使えるほうがいいじゃろっお主にとっては、
美月。』

思い出すのは”前世”^{むかし}の記憶の1つ。

自分の力の無さを

いやどんなに強い力をもっていても使えなければ意味がないと思い
知ったときの記憶。

力が引き寄せられる者もある。

だけど、…

自分の無力に嘆くのはもううんざりだから

だから私は…

「教えて、あなたが私に貸してくれる力のことを…
あなたの力の最大限を私は引き出して見せるから」

『美月ならそう思うたぞ。』

私の正解は朱雀七星宿の力を使う

まあ今はとりあえずここまでにしておこうかの。

今は始解で十分じゃろうし

先にお主の事をあやつらに認めさせてやれ。

大丈夫じゃ

美月ならのう』

後ろから来た二人の姿がやっと見える。

一人は女。

白に近い銀髪に、引き込まれるような深い新緑の碧。白い衣がまぶ
しい

もう一人は、男で、左目に大きな傷跡がある

黒い衣に黒髪に血のような赤い瞳の攻撃的な殺気を放つ人だった。

『あなたが美月？』

先に声をかけてきたのは女の方だった。

「はい。」

あの貴女が私『そうよ。私はあなたの斬魂刀の1つ。

あなたを認めるかはこの質問にいかにかえらるかで決めさせてもらおうわ。

私の納得のいける応えなら、私もあなたに力をかしましょう』

どうやらめんどくさいのが嫌いなようで単刀直入に彼女は言ってきた。

「分かった。私も真剣に答えましょう

あなたの言葉に」

『では聞いわ。

美月あなたは何のために戦うの？』

その言葉を聞いた途端、幼い頃から染みついた言霊が声となって、口から飛び出す。

「我、すべての人が平穩を送れるよう、また時には人たることも忘れず、大切な人を守るために」

精霊術師としての理…

だが無意識に答えたようにみえたのが途中から一変し目に強い光が宿る。

「そう、

ならあなたは、大切な人のために死ねる？」

「それしか方法がないならするかも知れません。

でも、少しでも可能性があるなら、残される人の悲しみを考えて、最後まで足掻きます。

大切な人も、自分も死なないそんな方法を見つけてみせるっ。

こんな私を大切にしてくれる人のために」

それは嘘偽りない言葉…

そして”前世”^{むかし}からの教訓

親しい人に残されるのがどんなに辛いかわかる。覚えて”ていいるから

『気に入ったわ。』

私の名前は癒宇^{イウ}。

癒しの力を持つ者。

必要になれば、私を呼びなさい。』

癒宇の背中から片方だけ右側に翼が生える。

「ありがとう、癒宇」

そして癒宇は姿を消した。

いよいよ美月は男に向かいあつた

彼は言う

『俺は、朱夏や癒宇のように甘くないぜ。』

お前純粹な殺意を持って人を殺せるか？』

殺人

人を殺すことが悪いことだとかそんなこと言うつもりはない

人を殺すのは覚悟が必要

それが自分の心を削ることだとしても…

きれいごとで生きて行けるほど人は綺麗じゃないから

できる限り人は殺したくない

でも…

「それが大切な人や、自分を守るために必要なら
自分の手を汚します

（もう汚れているし）」

男は美月の答えに対し

『ハハハ

おもしろえ

とりあえず認めてやるよ

俺を呼ぶときは生半可な覚悟で呼ぶなよ

それでいいなら

俺を呼べ
俺の名は刹那だ』

癒宇もそして刹那も消え、私と朱夏だけになった。

朱夏が私にこう言葉をかける。

『美月、刹那を試しに使おうとか思わないことじゃな。

刹那はわざと説明を省いたようじゃが、

刹那は諸刃の剣。

少しでも斬るいや殺すことに躊躇いがあれば、自分にダメージが帰ってくる。

本当に殺したいと思った時だけつかえ。

こころするのだぞ』

まるで私のしようとしそうなことを、先読みしたかのような言葉…

いや確かにすこしだけ試してみようかな〜とは思ってたけどね。

いや永年私とつきあってないね うん

「わかったよ」

そうして再び美月の意識は遠ざかっていった。

そして自らの心の世界から現実の世界へ…

紅い朱い光が収束し、1点へと集まる。

朱い柄の普通と同じか少し長い刀と

反対に懐に仕舞えるほど小さい癒という字が印字されている小太刀と

玄のつかで鎖にまかれた普通より長い刀

美月によりそうかのように
それはゆっくり下に落ちた。

彼女の半身、斬魄刀の誕生だ。

その一瞬高まった霊圧の強さに、

隊主室にいた、八番隊隊長享楽 春水や同隊副隊長 伊勢 七緒、

そして離れた一番隊にいた隊長山本元柳斎重國が

その部屋に集まる。

前者2人は、先ほど美月に大した霊圧がなかったからの驚愕で
後者はその霊圧の根っこがよく知るもう居るはずのない者に似てい
たため

そして、霊圧はおさまり、もとの抑えた霊圧のに戻った。

そして少女は

美月は目を覚ます。

自分の心の世界から現実へ

あたたかくて冷たい現実の世界へと

「どこどこ？」

あなた達誰？」

開口一番の言葉はそれだった。

「瀟霊廷内だよ。

僕は言ったよね。

この子が僕の副官の「八番隊副隊長の伊勢七緒と言います」…だよ」

「わしは一番隊隊長兼総隊長山本元柳斎重國じゃ

おぬしの名前は？」

「私？」

私の名前は雛桜美月

生前精霊術師でした。」

その美月の言葉に納得したように笑う山本総隊長。

精霊術師…

同じ精霊術師の血を引くなら似ていてもおかしくないから…。

ああこれで決められたサダメへのトキが遠ざかった…

「そうか。精霊術師か」

隊長格なら精霊術師のさわりぐらいなら知っているし、総隊長は直系5家の名くらいは知っている。だからこそ嘘ではないと分かった。

「それならいつまで霊圧を下げておくつもりじゃ？」

総隊長がやっと気づくレベルだったので後2人は驚いた。

「あ、はい」

美月は霊圧を上げる。だいたい死神でいう4席レベルに。

(ハンターの”念”でいうなら、絶からうつすーい纏に)

「これでいい？」

山本総隊長さん？」

「(4席レベルか)∴それで全力か？」

そうとわれ

彼女は考えた。

>

本当のこと言っているのかな？

ぶっちゃけ1割弱くらいなんだけど。

封印状態で…

うんごまかすの決定―
なんかいやな予感するし

<

という具合だ
封印状態というのはまた追って話そう。

「さあどうかな」
「ほう 1割のうち」

年の巧で読み取られたようで
思わず美月は天然で黒化する…

「天然だから恐ろしい―
バイ 月」

「心読まないで（微黒笑）

そうじゃないと目潰れちゃうよ
「はつきりいって怖い。
のだが飄々と

「細かいことを気にするな。
さてどこかの隊の3席にでもするかのう。」

まさに年の功ほどに厄介なものはないのだ…

第二話 対面

隊長、副隊長が集まった一番隊隊主室。

一の描かれた扉が全て集まったと同時に閉じられる。

まあ並の霊力の持ち主なら間違いなく倒れる。

こんな中で決めることになるなんて

メンドクサ（えっそこ？b y月）

八八 山本総隊長殺してえ（黒）

二話 対面 どの隊に？

「今日集まってもらったのはのう

今呼び子をどこかの隊の3席にしてもらおうと思っとな」

それに対し

「…」

な反応の六番隊隊長：朽木白哉と五番隊隊長：藍染惣右助（なんか胡散臭いby美月）

「バカバカしい。必要ない（海依だけで十分だ）」

ある意味海依が好きだなあと思わせる二番隊隊長兼隠密機動総司令官：碎蜂。

「うちは無理だ。」

もう3席は2人いるし」

と十三番隊隊長：浮竹十四郎。

「そんなコトカネ。
人によるね」

というマッドサイエンティスト
いや十二番隊隊長兼技術開発局局長の涅マユリ

「どんな子やねん。」

可愛い子なら欲しいわあ」

と訳のわからない感情を読ませない三番隊隊長：市丸ギン

「うちも無理そうだねえ

（可愛かったのに）」

残念そうにいう八番隊隊長享楽春水。

「隊長の言う通りね

（結構優秀そうだったのに）欲しかったですけど」

と伊勢七緒さん。

「治癒霊力があるなら、欲しいわね。」

四番隊隊長：卯ノ花烈が。

「人手不足だしどっかの誰かさんがよくサボるから欲しいな」

と十番隊隊長：日番谷冬獅郎が

そう、あの時の少年だ

美月を助けた

「「「あいにく3席が頼りになるのですね(だよ)」「」」

と七番隊隊長：駒村左陣と九番隊隊長：東仙要

そして三番隊副隊長：吉良イヅルが

「強えのかそいつ」

と十一番隊隊長：更木剣八が

それに続いて副隊長：草鹿やちるが

「剣ちゃんが欲しい子ならあたしもほしーい」

と。

「「「なのかしらどんな子(だろ)うね)」「」

と日番谷いわくどつかの誰かさんの十番隊副隊長：松本乱菊と

五番隊副隊長：雛森桃が。

「「隊長(マユリ様)と同じで」「」

と四番隊副隊長：虎徹勇音と、十二番隊副隊長：涅ネムが

「俺達もツス」

と仮六番隊副隊長：阿散井恋次と
九番隊副隊長：檜佐木修兵が。

二番隊副隊長は今回体調不良で休みだ。

「早く紹介してくれませんか。」

と冷たい声で、七緒さんが言う。

「まあいいじゃろ
入りなさい

いや入りにくいじゃろうから8番隊副隊長連れて来てもらえるかの」

そして

彼女こと雛桜美月のもとに来て手を引く。

まあ無駄な抵抗をしつつ

姿を表した。

まず彼女の容姿や格好に皆驚いたようだ。

格好は現世の制服。

年は日番谷隊長よりは年上だろう13、4歳ほどの年格好

髪と瞳の色は朱。

阿散井より明るくてまた心なしか炎のよう

髪は長くておだんご頭。

顔立ちは可愛くて綺麗だ。

見た目で判断するなだろうが3席に命じられるように見えない。

しかも

全員（何人が除く）「「「「「（それに霊圧を感じない）「「

「「「「「

というように思うのも無理はない彼女が霊圧を制御し、すべて閉じ込めているからある。

ちなみに不真面目にも

「（かわいい子ちゃん）「

と考える市丸に

「（昨日のやつか？

いやでも魂葬したばかりだぞ。

他人のそら似か？）

とかんがえる日番谷。

「（やっぱりかわいいな。

それに霊圧隠してるのがわかんないよな。やっぱり制御能力はなかなかだよねえ）」

とかんがえる享楽さんである。

まあ総隊長でさえ違和感を覚える程度しか不自然な点はないのだ。

ふつうどこかに乱れが出るはずだから

ちなみに今感じることでできる霊圧はほぼないに等しく、徒人同然なのだから。

「雛桜美月です。」

ほとんどむりやりこのくそじいんに連れてこられました。

もちろんやるからには精いっぱいやらせてもらってます。」「

と怒気を少し孕んだ声でいう。

総隊長は飄々という。

「ほほ

美月そろそろ霊圧を抑えんでもらえるかの。

それに斬魄刀をもってこんか

残さずじゃぞ。」

しびしびと美月は取りに行き

斬魄刀を3本も持ってきながら

霊圧を3席レベルへと引き上げた。(赤子をひねるほど簡単よ
y美月)

驚愕の視線が集中する。

それもそのはず。

普通死神は一本

しかも席官以外は浅打のものがほとんどだ。

今現在例外は3人のみ。

今日欠席の二番隊副隊長 如月 海依

三番隊3席 神無月 由宇

4番隊3席 大道寺 皐月

だけ。

しかもその3人でさえ2本。

また、美月が持つ斬魄刀のうちの一本は普通より一寸ばかり長い。

(斬月より少し短いくらい)

(一本は逆に短い)

斬魄刀の長さは霊圧の大きさ。
しかもここまで霊圧制御がうまいということは、これが限界値だということだから。

「あつ 日番谷君!？」

周りを見回しているうちに、美月は彼に気づき指を指した。

「何じゃ知り合いか？」

「・・・やっぱり昨日のヤツか。」

ガキの癖に妙に悟った眼をしゃがったヤツ」

「あー ガキにガキっていわれたくないんですけどー

昨日もさつきもいったけど雛桜美月って名前がちゃんとあるんです

ー」

でも・・・

隠してたことに彼は気づいたんだ

私のもつ闇に・・・

完全じゃないけど

過去のせいどころか 自分がつらい目にあって当然と思ってること

に…

だから興味を持った。

そしてその意思の強い瞳も

まあ

俗に言う一目ぼれってやつに近かったなって、この時を思い出して私は思うな

「ペ…」

やめんか

日番谷、 雛桜もな」

狐目隊長が言う

「説明してくれへん？」

なんで十番隊隊長さんと知り合いなん？」

「昨日 魂葬してもらっただけです。

ちよつとミスっちゃって、大虚 に殺されただけです。私、精霊術師なので…」

「そうやったんか
よかったなあ」

胡散臭い
うざい

だてに長年、記憶を蓄積していない
生きていない・・・

この人も、裏で微笑む五番隊隊長さんや、一見無表情の色黒さんも
怪しいと思ってしまった。

信じてはいけないと

それを感じさせず、美月は言った

「あの さっきの会話から 2、3、5、9、12、13は嫌です。歓迎されていないようですし……」

「ほうワシ個人としては、6、8、10、11のどこかにはいつてもらいたいのだが」

拒否権はなさそうだし、嫌なところは入っていないとくに胡散くさいあの人たちの隊じゃなくて安心だ。

「できれば体験してから決めたいのですが……」

「では6番隊から順に 2日ずつでいいかの……よいか、朽木」

「わかりました、ついて来い恋次」

「ほら来いよ、あー」

「雛桜でも美月でもどっちでもいいです。」

「雛桜。」

・
・

俺は、6番隊副隊長代理の阿散井恋次だ。」

「私は、6番隊隊長朽木白哉だ」

じーっと美月が見るのは副官章。

「これって椿

恋次さんに似合わないね。

もしかして隊の象徴？

アハハ

朽木隊長はピッタリだけど副隊長にあわねえー

だってたしか有名な花言葉”高潔な理性”だよっ

似合わなすぎー」

冷たくて冷静そうなでも

心根は優しいんだろっなと思っ目を持つ朽木さん

「うつせーよ」

不器用そうで直情型で猪突猛進そうな阿散井くん

まあ

少しはよきそつかな

おまけ

「人は見かけに寄りませんなあ」

「…そつじゃの

それにしてもあの子によくにとる」

続く・

第三話 4つの隊の3席体験 輝の救い

第三話 4つの隊の3席体験 輝の救い

IN六番隊

「今日明日だけ3席としてお世話になります

雛桜 美月です。

分からないことが多いかもしれませんが、

よろしくお願いします。」

穏やかに

彼女は笑った。

さりげない動作

一昼夜ではできない振る舞い。

それは貴族出身の多い死神でもめつたにみられないものだった。

(ちなみに特にこの六番隊には割合が多い)

「あの 朽木隊長。今日は何をすれば宜しいですか？」

(なんだー あの変わりよう昨日との違い

同一人物かー!!!?)

と思うのは 恋次だ。

「そうだな。この書類をやって貰えるか？
今日中だ」

そう言って渡されたのは、5?ほどの書類の束

(た隊長新人にそれは……あんまりだと……) b y 恋次

(なんだこれだけかぁ) b y 美月

「はいっ

わかりました」

ニコッ

隊員全員が見惚れた。

それこそ老若男女問わず

それほど愛らしく綺麗な若干13歳とは思えない微笑みだった。

「そうか。よろしく頼む」 実は結構気に入ってる」

すらすらすらすら

あの量を僅か1時間半で終わらし

）でも筆って書きにくいね

まあ普通の子よりは慣れてるけどね

呪符とか書いてた時代もあるしトキ）

「あ終わりました。

朽木隊長 確認お願いします。」

しばらくして

「誤字脱字も間違いもない。これを四番隊へ

こちらを十番隊へ持って行ってくれ。」

（げっ

暴言隊長のとこっ）

あーあ

昨日の今日でいくの気まずいよなー

うん

悪い人じゃないのは分かるんだよね

ってことでズルズル先延ばしにして先に4番隊に……

ところ変わって4番隊……

「（たしか・・・）

隊長が卯の花烈　さんって女の人で・・・

温和そうな人だったな。

で、副隊長は　名前は聞いてないけど

背のすごく高い人だったよね・・・

失礼します

六番隊3席（空席だったらしい）の

雛桜　美月です。

書類を届けに来ました」

卯「入ってください」

「この書類どこに置けばいいですか？」

卯「勇音」

副隊長の人が　書類を受け取る

「では　失礼　卯「ちょっと待ってくれるかしら？」　はい・・・

（あれなんか一瞬寒気がしたような・・・）」

信じたくありません

こんな 優しそうな人がどす黒いなんて

卯「あなた 治癒霊力は使えます？」

「あー たぶん使えます

3本の斬魄刀のうち1本は治癒系ですし」

卯「そう それじゃ 明日だけでもいいのでうちの隊の手伝いをしてくれないかしら？」

あれ？ 疑問形なのに有無を言わさない雰囲気か・・・

「く 朽木隊長にお願いしておきます・・・

（話せば 朽木隊長は分かってくれるよ うん

帰ったら 明日分も終わらそう・・・）」

卯「よろしくお願いしますね」

極端に黒属性に弱い 美月であった。

（あーあ

次は…十番隊か

行きたくないなー

あの時は私むきになりすぎたし

ていうか 霊圧からして 卯月と同じ水とか氷に関係ありそうよね

副隊長はたしか 巨乳美人さん だったよね

とか考えているうちに十番隊隊首室前まで来てしまった・・・

はあ

「（副隊長だけだといいなあ

）

六番隊3席の雛桜 美月です。

書類を届けに来ました」

「入れ」

うわあ
いるし

「失礼します。書類はどこに置けば？」

さっきも思ったけど

悪い人じゃないのも

怖い人じゃないのも

冷たい人じゃないのも

分かってる。

彼の霊圧は、どこまでも冷たいと感じるけど、

普通はそうかもしれないけど

どこまでも 廣くて広くて そういつなら冬の蒼穹ソラで氷空ヒコ。

優しくて、 どこか温かい

そんな 内面が感じられる。

まあ これは 永い永い生きてきた時間があるから分析できるって

いつものもあるんだけど・・・

だから ムキになってしまった私が恥ずかしい

「ここに置いてくれるか？」

「はい」

「ここ」というのは、隊長の机の上

今言わなきゃ さらにいいづらくなる

そう思った私は

「ああのっ

昨日は すいませんでしたっ

失礼な態度をとってしまって・・・」

「いや いい あの時は俺も大人げなかった」

大人げなかったって・・・（呆れ）

この見た目で言われても

言わないけど

よかった 彼に許してもらえて

“私”は決して赦されない十字架を背負っていると思われそうになる。

前世の“私”が犯してしまった罪を

「あいつ それで 「ちょっとお茶して行きなさいよお」 えっと
副隊長の「松本乱菊よ よろしくね」「はい」

明るすぎる気がする。

嫌いじゃないんだよ

苦手でも ただ少し弱いだけで

そついう間に 引きずられていく私

「美月 って名前だったわよねえ。

茶菓子はいる？」

「はい（ないに比べたら）」

「いいのよお 敬語なんて」

「うん」

約1時間は足止めされてしまった

日番谷隊長も忍耐強いよな

「すみませんっ朽木隊長。」

あの乱菊さん 松本副隊長につかまってしまっ……

それで 卯ノ花隊長が 明日私を借りたといっていたんですけど・
「」

「かまわん 行け」

「あ ありがとうございましたっ

じゃあ 明日の分もやっておきますね」

感じのいい笑顔を 美月はしていた。

かなり 朽木隊長は美月を気に入ったようだ

本人は気づいていないが……

仕事ができる

早い

気遣いができる

まあ 関係ないが容姿端麗で驕らないので、
隊員たちにも好かれている

・
・

本当の副隊長が、意識不明で今現在

阿散井恋次が代理を務めているが

彼は あまり書類作業が得意でない

そのため すこし たまりがちで
定時過ぎまでかかっていたのだが

今日は 早く終わったのであった。

次の日

「やっぱり 朽木隊長許可してくださったのね。」

「（やっぱり？）はい 今日一日頑張りますのでよろしくお願いします」

「今日は3席が休みの日ですから

私か 勇音に聞きたいことはいつててください」

『患者が多数来ました

虚により、負傷。

すべて 十一番隊です。』

まわりの 隊員が嫌がっているのがわかる

なんでだろう？

「11番隊……なら美月一緒に来てください」

「はいっ」

怪我をした隊員の前で言う

「やってみなさい

11番隊だからかまわないわ」

黒い

黒い

まあ いつか。

めんどくさいから 霊力でなくあれで

「《キュア》」

傷は跡形もなく消えた……

「今のは… 治癒霊力ではありませんね

何をしたのですか？」

「うん？」

ここまで 略式なのは私だけだけど、

傷の周りの空間を隔離して、時間を戻しただけですよ」

「すごいですわね」

別次元だ

彼女の使う能力はそんな簡単で容易なものではない

同じような一族でも術式はある

だが、時間や空間に関するものは複雑怪奇

みっちりそれについて研究した者でさえ、数分戻すのがやっと

また空間を隔離するなんて神業なのです。

使えるとしても陣や複人数もしくは道具は必須なのです。

「そうだわ

こちらに来てくれますか？

貴女ならあの患者を助けることができるかもしれませんわ」

私が・・・？

私が誰かの助けになるなら何でもする

だから

ついて行った。

連れてこられたのは、姿形は自分より数歳上に見える女性が横たわる部屋。

「あの・・・この女性は？」

見たところ、外傷は適切に治療され、もう治りかけている。

「この人は今あなたが体験している六番隊の本当の副隊長

青木 輝^{ヒカル}です。

約半年前、誰かとの争いで腹を刺されてヤマはめけましたが、

精神的な傷が深いようで眠ったままなんです。」

「そうなんですか」

閉ざした心

私にはいや“私”は知っている。

実際に 心が軋んだことも、閉ざすことも知っている。

だから・・・

「私倒れると思いますけど・・・

何の問題もありませんので・・・」

「なにをするつもりです」

私は、そついいながら輝に近づき、
額に手を置きながら

「こうするの 《インナーハート》(心の中)《》」

人の精神世界へ入るための言霊

まあそれと同時に連鎖して頭に様々な術式を頭に描きださなければ
ならない。

そして、他人の精神を受け入れるだけの器も必要だ。

ドサッ

私は 彼女の精神世界へと降りて行った。

斬魄刀がいる世界は精神世界の一部である

それだけがすべてではない

そこは真つ暗な暗闇であつた。

あたりは歪み、1点の光もない

「ついた

ここが輝さんのインナーハート

輝さん 聞こえる？」

「誰っ!？」

私の世界に踏み込まないで

どうせ 私なんか必要ないんだからー」

「（おちついて 彼女の心を感じるんだ…）」

いつもいつも私を殴り蹴り暴力をふるった両親

気味の悪い オレンジ色の瞳

気味の悪い、力

私の体に残った煙草の焼痕

残ってしまった青あざ

それでも私は死にたいとは望まなかった

だって 大切な大切な 私の妹

私が守って守って守り続けたもの

持ってしまった

私と同じ異能

それを隠し続けて 妹使ったのを私が使ったことにして

いとしい愛しい私の妹

最後に私は両親に殺された

守ったことを後悔なんてしてない

でも私が墮とされたのは

南流魂街80地区 荒神

そこは 地獄だった

血濡れで、赫にまみれた世界

私は世界に必要とされてなんかいなかったんだ

ひっしにひっしに 私は這い上がった

そして死神になった

私が生前から持っていたのは霊能力の一種と知って私は安心したんだ

ああ 私は“化け物”なんかじゃなかった

そう思った

大切な人ができて

私なんかを好きだと言ってくれる人ができて

幸せだと感じたの

でも それは仮初の幸せだった

私を襲った絶望

彼がほしかったのは 肩書き

副隊長の恋人という肩書

愛してなんかいなかったんだ

要らない

いらない

イラナイ

こんな世界要らない

哀しい

悲しい

憎い

痛い

イタイ

カナシイ

世界がいらなんて思いなんて私は

いや

“私”はよく識っている

大切な“妹”を殺されたとき

大切な“朋”を亡くした時

両親が“私”達双子を殺したとき

世界が神が“私”たちを見捨てたとき

この手が赤く染まったとき

世界は、綺麗なだけじゃない

景色がきれいじゃないなんていうつもりはない

世界は醜く汚く穢れている

それは“私”が“私”達はよく識っている

人間は 醜く、欲深く、傲慢で、嫉妬深く、弱い

だからこそ 自分と違うものを排除しようとする

ヨーロッパでの魔女狩りばかり

学校でのいじめばかり

それは 仕方がない

でも それだけではないことも識っている

人の情、愛を

時にそれは権力に押しつぶされてしまうものであるけれど

「輝さん・・・」

いつか、あなたのことを思ってくれる人とも会えるわ（“私”でも出会えたのだから）

淋しかったんだよね寂しかったんだよね

苦しくて憎くて悲しくて

でもね 貴女だって私だってこの世にたった一人しかいない大切な人

【私なんか】なんて言っちゃダメ

屑なのは貴女を利用して捨てたその男

ねえ、殻を割って外を見てみなよ、おいてごらんよ

貴女は一人じゃない

憎しみで支配されそうな自分が醜いなんてそんなこと思っちゃダメ

いいの 憎しみを持ってたって

人は 自分の中の昏い感情と闘って

そこにあるんだからね

貴女はひとりじゃない

私がひとりにしない

私は味方だから

それに 朽木隊長も貴女を少なくとも副官として信頼してると思っ
わ」

『なんで なんで

あんたはそんなこといえるの?!?!?』

「昨日ね一日だけど六番隊の3席をさせてもらったの

阿散井恋次 という人が副隊長の代理をしていたわ

でもね 正式な副隊長はあなただと聞いたわ

意識不明になって半年たつのにね

ふつう 信頼してない人をそのままにしておかないわ

朽木隊長はそんな人よ」

『そう・・・ね

朽木隊長はそんなことを』

「必要なのは 一歩ね

勇気をもって・・・

さあ 私の手をとって」

そして

二つの手が重ねられた

『ありがとう』

別に記憶を改竄することもできた

でも、経験はすべて 心の力だ

普通の一世分の人生程度は

私は目を覚ました

「っ」

少し頭が痛い

倒れた時に打ったかな

「ん 卯ノ花隊長？」

「ここは……」

輝さんも目を覚ました

「おはようございます

青木副隊長

ありがとう

雛桜3席

「おは・ん？ 雛桜3席？？」

「【はじめまして】

今、体験で六番隊3席をさせてもらってる 雛桜 美月です。

」

「この声・・・

あの時の・・・

ありがとう 美月ちゃん

「いえ 私の経験が豊富なだけですから ね」

オレンジ色の瞳を輝かせて

やわらかく笑った。

第四話 4つの隊の3席体験？ そんな彼女の實力の一端

第四話 4つの隊の3席体験？ そんな彼女の實力の一端

～in八番隊～

「今日明日お世話になります

雛桜 美月です。

よろしくお願いします。」

苦笑いしつつ言った

顔が引きつる。

前来た時も思ったしかしここはこないだとは違う仕事のための部屋の隊主室

なのに、なのに、

何この部屋

お酒臭すぎっ

いかん なまじ五感が普通より鋭いばかりに・・・

これは キツイ

いや 普通よりは強いよ 酒に

でもその私でも 匂いだけで酔いそう

聴覚なら いつも通りリミッター代わりにゆるい耳栓をするんだよ

いや戦闘時は外すけどね

目は生前はカラーコンタクトに度を入れて見えにくくしてたけど

今 すごく見えすぎて 時々目が痛くなるし…

「気を抜いてていいよ

美月ちゃん」

駄目だ この人からぶんぶん匂ってくる

この人実力はあるんだろっけど駄目大人だ

典型的な自堕落な

完全無視だ

「伊勢副隊長。」

今日は何をすればよろしいでしょうか？」

「ごめんなさいね。」

隊長

が全然仕事をしないから、ほかの隊に比べて仕事が多いのよ。」

「そんなのかまいませんよ。」

それにそれは伊勢副隊長のせいじゃないんですから

伊勢副隊長はすごいです

悪いのは全部

隊長

「なんですから」

「ありがとうね 美月ちゃん

それもそうよね 貴女に任せたいのはこれだけあるのよ」

渡されたのは

8? 程の書類の束

青木副隊長が長休暇をとり、増えていた書類量の1・5倍以上

「わかりました

伊勢副隊長頑張りしようね」

筆を握り腕を遣う

その仕事は的確かつ正確

きれいな文字

筆を使い始めていやシャーペンや鉛筆に慣れた現代の人間がすらすらと

たとえ前世の“私”が筆に慣れる生活をしていたとしても

2時間後 無事に終了した

「これでいいわ 休んでて」

そういわれても、ほかの人の墨汁を補充したり、書き損じの書類を書き直したり

気を利かせ定時までそこから離れることはなかった

その日の定時後、美月は自室に戻ろうとした。

その帰り道で

きやつ

女の子の少し驚いたような声が聞こえた。

「……大丈夫？つて

五番隊副隊長さんじゃない」

「あれ？ こないだの・・・

「今は八番隊体験中の雛桜 美月ですよ。」

そうそう

あつ 私名前教えてなかったよね

私、雛森 桃っていうの

貴女 この間しろちゃんと言い合いしてたよね

仲悪いの？」

「しろちゃん？」

「あ いっけない

日番谷隊長だった

よく幼馴染のころの呼び方で読んじゃうんだよね。」

「仲・・・いいんだ」

ズキンと痛んだ気がした

身の覚えのある痛み

かつて “私” がある時は太陰にある時はウィンリィに感
じた感情

？嫉妬”

そんなわけあるわけないと

思った

“彼女” 達の中では1番恋しているといえる（ほぼ同じ）美月
ではあるが

数多くある前世の中で

“一目ぼれ” なんてしたことがなかったから

そんな感情は、

ないものとして扱った

まあ そうですね

八番隊はほかに言うことはないかな

in 十番隊

「雛桜 美月です。

二日間よろしくお願いします」

目上の人に敬語を使うことは美月にそれこそ魂の底まで染みついて
いる。

「ああ よろしく頼む。」

とりあえずこれだけしてくれ」

渡されたのは5〜6?程、六番隊より少し少ないくらいの量の、書類。

「これだけですか?」

(それだけでも多いわよ by乱菊)

「なんだ?」

もっと増やしてほしいのか?雛桜」

眉間にしわが増える

「いえ、八番隊や六番隊に比べて少なかったし、乱菊さん 松本副隊長はあんなに多いのに…」

「享楽と一緒にするな。あんな女好きで仕事に関しては無能なあいつと……」

松本の場合

あいつがサボりまくるのが悪い。

それにあれでも、締め切りの近い奴は

俺が取り出してやってる

松本の自業自得だ。」

見事ばっさりと言い捨てた。

「そうですね

乱菊さん これ終わったら手伝いますよ

仕事送れるの困るし

」

私は手伝うといったが、

私自身限っていうなら決められた仕事をしない人は最低だと思
し、自分の決められた役割や責務を果たさずとしない人は最低だ
と思う

もっと最低なのは仲間を見殺しにすることだけど・・・

上の立場に立つ者は、

自らの感情を捨て去ることはなくとも

それに流されない心が

下に与える心が必要だから

上は下を守るものだと思は思う

下は上を守らずさっさと逃げてほしいとも思ふ

たとえ最低と言われようがそれが私だから

人の上に立つということは、決して簡単なことじゃないのだから

まあ

少々厳しいまた呆れが入った思いを持ちながら

自分の仕事を終わらせた

「日番谷隊長点検お願いしまーす

乱菊さん 手伝います」

と残っていた三分の二ほどを取った

（もうこの辺で書類仕事に関しての乱菊さんの根気は見限った美月であった。 はあ ）

それに美月が取り掛かろうとした途端

「五番隊副隊長雛森桃です。入ります」

「雛「桃ちゃん。何か用？」」

さらに日番谷の眉間のしわが増す。

「昨日は美月ちゃんが遊びに来てくれたからね

今日は乱菊さんや美月ちゃんとおしゃべりしようと思って仕事終わらせて来ちゃった」

ただ今 定時4時間前である。

少し 私はその発言が気になった

が、五番隊隊長の言い知れぬ不気味な雰囲気や、気配を思い出し彼のそばにいるよりはと思い直した

「たいちよーっお

いつも 怒っていると眉間のしわが増えますよー……」

乱菊さーん 余計なこと言わないで

私たちが原因なのに………

ほらほら しわがさらに増えた

「まあつもとおー！ー！ー！！」

てめえらのせいだろうが」

「日番谷隊長」

それあんまりです

乱菊さんだけです。 私ももちゃんも仕事一応終わってるんですよ。

ね 乱菊さん 後で遣りますよね。

私がやらせますし手伝いますので……」

最低限 決められたことはやる

それは義務であり責務。

仕事の中断の理由の一端は自分なのに手伝わないなんてことしない。

まあそれは 自分より能力が下の人とずっと付き合ってきた “私” と私が学んできたこと

だって人間 私と同じなんて思わないようにしなきゃいけない。

私をすべてわかってくれる人間なんかいない

少しだけでも線を引くそのことで、自分が傷つくことを防ぐんだ

“禁忌を犯した少女”

“世界を滅ぼしかけ、朋を殺しかけた少女”

“無力な少女”

“化け狐の子の孫”

“暗殺者”

“偽善者な偽聖女”

朋以外に味方なんて味方なんて

数えるくらいしかいなかった

朋でさえ 最初敵の立場の時があったのに

どうして完全に信じられる？

あああああ

もう ネガティブに走った

目の前では、少し涙目になりながら日番谷隊長に頼み込む雛森副隊長

日番谷「わかつ

日番谷隊長！ 松本副隊長！ 雛桜3席！

あつ 雛森副隊長もいらっしやっただんですか

」

やはり 桃ちゃんも副隊長

さっきまでの顔が変わり、副隊長の顔をしていた。

メノスグランデ
大虚が数体と巨大虚数十体が発生！！

場所は北流魂街80地区 更木。

ただ今、下級席官が向かっています。時間が問題でしょう。

「わかった。すぐに向かう。」

松本、雛森行くぞ。

雛桜は、残っている。」

「っとうしてですか!!」

「お前は虚と戦ったことないだろうが

お前は死神になってからまだ数日しかたっていないんだ絶対に待ってろ!!」

私はその言葉を聞いて、思った。

今の私には力がある

守る力も

闘う力も

癒す力も

力があるなら使いたい

でも、日番谷隊長は私を心配してくれている。

でも、

「絶対にそれは聞けません

虚の相手くらい

生きてきた年数マイナス4年くらいはしているし。

闘うこと慣れてます

今私は死神です。

力も

斬魄刀もあります 行かせて下さいっ」

日番谷隊長は ため息をつき、

「分かった。 でも死ぬなよ」

「当たり前ですっ」

私は、一番長い刀 身の丈より短い、長い <刹那>を置いて
行った。

（現場）

「あつ 日番谷隊長」

「被害の状況は？」

「下級席官が応戦していますが、重傷者が1名、軽傷者多数です。

今 四番隊に要請するところです。」

「（それくらいなら）

その必要はないわ」

「なぜですか！？

雛桜3席っ」

「重傷者は1人なんでしょ

今私が治す」

そして 私は癒宇を 1番短くてナイフより少し長いくらいの斬魄
刀を取り出す。

ちょうど短刀といえる長さかな

「ちょ 何してるんですか」

私はその声を無視して（だって論より証拠だし）

言霊を 唱える

「癒せ、癒宇」

その瞬間霊圧は上がり、柔らかい光を放った。

柔らかな 翠交じりの白の光を放った

「戻れ 癒宇終わったわよ…「危ない！」

っ

大虚が私を爪で刺そうとしたのだが、間一髪でよけた。

「大丈夫か」

ちなみに怪我をしていた男を片腕で抱えている

「うん でもちよっと 頭にきた

この日とあずかっというて

癒宇をしまい、腰に差している長い刀に（腰に差すと下につきそっ）
手をかける。

朱い柄に鐔は羽のような形でこれも色は淡い赤。

それを包む鞘は、紅色。

長さは普通の斬魂刀と同じか少し長いくらい

ちよつと 日番谷隊長と同じくらいの斬魂刀と同じくらいの長さであろう。

「何する気だ。」

「じつするんです。」

“炎よ散れ、朱夏”！！

朱夏は、炎をまとう 朱い炎を

（火力は灼熱。魂をも燃やし尽くす炎。お前は昇華されるしか助かる道はない。）

そうして私は大虚を一太刀で切り伏せた。（隊長たちは雑魚たちを相手していた 始解せずに）

「終わったよ。 日番谷隊長」

「ああ（なんて奴だ。もう斬魂刀を使いこなしてやがる）」

その日は残業だった

乱菊さん書類ためすぎ

でも 私はどこに行くか決めたので

十一番隊体験は断った

そして 私は十番隊に入隊することを決めたのだった

番外編 十一番隊初訪問の巻（前書き）

十番隊に入った美月の初めて11番隊訪問の話です。

背負うものシリーズ以外は、時軸順です

番外編

十一番隊初訪問つの巻

「雛桜」

「はい？隊長何ですか」

「この書類届けて貰えるか？」

「はい」

えっと

十一番隊かあ」

(番外編) 十一番隊初訪問つの巻

「十一番隊って戦闘部隊で有名だし、

戦いしか 意味を持たない人って嫌いなんだよな

（でも、副隊長は可愛いよなあ あと更木隊長には実力ばれたくないわ。

意味のない戦いなんて嫌いだし…）」

等々と十一番隊隊舎前で考えていた。

はっきり言って怪しい

「おいお前うちに何か用か？」

と私に声をかけたのは坊さんのようなツルピカ頭（失礼）の男の人

その隣には頭に翹をつけたおかつぱ頭の綺麗な男の人

「あ はい 十番隊から書類を届けに来ました。」

と臆することなしに言った

それが気に入ったのか？

「ふうーん

まあ、入りなよ。(美しいし)」「

中に入って 絶句した。

「えつと なんですかこれ えつと・・・」

積み重ねられた書類の山に散らかったごみ、散乱する酒瓶に垢にまみれた机。

十番隊と違いすぎる(ちなみに綺麗さなら 一 二 四 五
六 七 九 十 十三<三 十二 十一 だと私は今思った)

「僕たちを知らないのかい?君

僕は十一番隊第五席の綾瀬川弓親でこっちが…」

「更木隊三席の斑目一角だ。」

「すみません まだ他隊までは興味向かないので覚えてなくて(お
いっ)

（だって 他隊より今の自分の隊のこともっと細かく知りたいじゃない。）

まあなにを知ったかは秘密だけど…）

十番隊三席副官補佐の雛桜 美月です。」

「ああ 君があのだタキャンした子かー。」

「はん あの更木隊長が言ってた。」

「そ・ん・な・こ・とより

いったいこれは何!？」

半月からひと月分はあるぞ

「それは溜めてるやつだよ √√
「

私の後ろから飛びついてきたのは、ピンク頭の女の子ー草鹿やちる。

「草鹿副隊長…」

敵意とかそういう負の感情の類は感じなかったから、気配に気づいても気にしなかったけど…

「ひつつんのところに入った子だあー ねえねえ名前は？」

「雛桜 美月です。草鹿副隊長」

「やちるでいいよー」

美月ちゃん。」

ひつつんってひつつんって…

爆笑しそう…

必死に笑いは堪えたけど…

「じゃあ やちるちゃん

仕事しないの？」

「えー だってゆみちーが私は手出しするなっていうし

たまにでいって 言ってるよ」

「ちょ 弓親さん

私手伝いますので、今暇ですよね、断定、

やりましよう遣りましよう、より協調、

「う、うん（迫力が…）」

逃げようとする一角さんの背に手をかけ、

「逃げないでください（黒笑　ただし無意識）」

「あ　ああ」

「おはようございます」

丁寧な言葉が割り込んだ

顔を向けると、アツシユ・灰・色の髪に黒色の瞳、外人の血が混ざつてるように見える男性。

「あれ？」

珍しいですね

十一番隊じゅういちばんたいに他隊たたいのしかも女性がなんているなんて…」

その声のする方向へと私は振り返ったのだった。

（視点移動）

一瞬時が止まったかと思った。

艶やかな朱色アカの髪に瞳。

お団子にするとともに下に後ろに伸ばした髪。

外見年齢は草鹿副隊長より少し上ぐらいなのに

惹かれた

魅かれた

儂げに見えるのに、どこか強い意志の秘めた瞳。

ほっそりとした肢体。

守ってあげたいとそう思った

(視点回歸)

「あ あのう

どうしたんですか？

黙っちゃって…」

「あ ああ ご免

俺は、十一番隊4席をしている。須王修宇。君は？」

「初めまして、十番隊3席雛桜。美月です。」

それがいずれ零番隊第六席となる須王修宇ともファーストコンタクトであった。

「で、いったい何したわけ？

また副隊長がおいたしたわけ？」

「ぶう そんなことしてないもん

修ちゃん」

「で、じゃああなたにも手伝ってもらいます!!」

「この仕事今日中に終わらせますよ

半分はわたしやりますから

やらないと 内をはじめ周りにも迷惑ですし」

後のことを聞くと、須王も含め少し顔を青くしたらしい・・・
中にはあまりのスパルタぶりに悪夢にうなされる者が何人も出たら
しい

あの書類の山を鬼気とした勢いで、終わらせたそこには、
十一番隊隊士達の屍が転がっていた
(違っ)

これくらいでへばるなんて、情けないなあ

(注) 今まで初めて4時間ほどしかたっていないせん。
その間に 15〜20日分のいつも200人で遣る書類を 今いる
数十名で終わらせたのである。

まあ そのうち半分以上は 美月が終わらせました…
さすがに 美月にも疲労の色が見える 普通はその量5日はかか
ります… byユエ)

「とりあえずみなさん1人1人渡したのは貴女土地の能力ギリギリ
の量です。」

みなさんでも このくらいできるんです

今度たまっていたら私がまたやらせますからね（にっこり）」

黒くないのに怖い顔だったと のちに某三席は言う。

「おめえ すごいな」

と一角は倒れたまま言う

「これくらいなら 大丈夫ですよ

6歳のころの2学部分の大学時代の論文6年分に比べれば・・・

あれはさすがにウザかった

“私・サリア”の知識あの時はなかったし…

一からだったもんね。 一番の記憶の経験が増えたのはよかったけどね…

あっ 一角さん 明日練習試合してくんない？」

そう 話を逸らした

まあ 一角さんと試合してみたいと思ったのは本当

でも 今そういった理由は簡単

知られたくないから

私の 罪 と 咎

赦されることのないそれ

私という人間の根源

そんな簡単に話せるものでもない

まあ 詳しくは 言えないがサリアとは、前世の1つ

医師であった“私”。

だって 私は ここの底から信じることなんてできない

心のどこかでは思っている

私のすべてを受け止めてくれる人などいないと

それを 耳にした人は多かつたらしく

その次の日にはほとんどの隊員が知っていたのであった。

当然 日番谷隊長にも届き、

冷たい雰囲気には他隊員たちはびびっていた

まあ 本人はその理由にまだ自分でも気づいていないが…

斑目さんと私は竹刀をもってそこにいた。

だって、斑目さんはともかく私の斬魄刀は抑制しないと被害が大き
いもん。

まあ 山じい（山本総隊長）のよりは、マシだけどね。

もともと対人よりも対化け物に特化してるし

ただの訓練で神経つかうことしたくないし…

何にも考えずにのんびり戦える（えー）し。

気が抜けるときは抜きたい派だし…

「手加減はなしでお願いしますよ。」

同じ3席だしね。」

「ああ 分かったよ。」

行くぜ」

「いつでも」

バシバシバシ

激しく竹刀がぶつかり合う。

それもかなり高速で

はつきり言って視認できているのは、副隊長であるやちると綾瀬川5席（須王は欠席している）

美月は、積極的に攻撃せず、受け身ばかりだ。

斑目さんは、大ぶりかつ大きな動きだが、美月は最小限の動きだけで攻撃を受け流す。

「はん

避けるばかりせずにかかってこいよ」

場所は~~~~~

「聞こえたぜ

行くぜー 野郎ども」

「美月ちゃんはどつする？」

「いくよ。もちろん」

現場では……

「だいたい、4、50体かな。 (だいたいB〜C級じゃん。)

「美月ちゃん美月ちゃん

斬魂刀はー？」

あ

やっぱー

隊舎に置きっぱなしだわ

持ってるの、癒宇^{いづ}だけじゃん

癒宇は、短刀（20？あるかないくらい）だから持ち歩きやすいけどさ

これやっていいかな？

いまだに3席がどれくらいできるか測りかねてるけどこれくらいできるのかな？

いいや、やっちゃえ（めんどいし、

ごまかせばいい）

「来い、“朱夏”。」

強い力を込めた言霊を放ち、パシッと手のひらを合わせゆっくりと

美月は開いていった

そこに現れ出たのは

刀

まぎれもない彼女の斬魄刀。

朱い柄つかに鐔は羽のような形でこれも色は淡い赤。

それを包む鞘は、紅色。

長さは普通の斬魄刀と同じか少し長いくらい

ちよつと 日番谷隊長と同じくらいの斬魄刀と同じくらいの長さであるつ。

まあ この時点で人並み外れていることに本人は全く気づいていなかった

普通の死神は言霊は使えないのだから。

「ちよつ いきましようか。

朱夏。

炎よ散れ、“朱夏”」

始解の解号を唱える。

朱夏は、炎を纏い、それで美月は虚をなぎ倒していく。

的確に頭を狙い、誰よりも多く、誰よりも早く、周りを把握しつつ無駄を出さず。

「全部で（他が倒したの入れて）46体か。」

（十一番隊っていいってもこんなものか。 ひでえ 結構普通じゃん

血の気が多いだけで。」

「弓親さん、大丈夫でした？」

「当たり前だね。」

負傷者に対しても4番隊にでもいえ

「けが人何人？」

聞いてどうするつもりか知らないけど、

1人は重傷、二人が軽傷、まあ少ないものだよ。」

「それくらいなら、呼ばなくていいよ。」

私が何とかするから。」

どっちっ？」

すると丁寧にやちるちゃんが連れて行ってくれた

「こっちだよー」

「ありがとう」

けが人のところに行くはず、美月は

「大丈夫ですか？」

と意識確認した。

（軽傷者の意識はあるし、全然問題なしと、

重傷者は、意識はないが、呼吸は正常…ね。）

空間系の術を使うまでもないので、（あまり多用すると、その人の体内時間がおかしくなることがあるらしいので）

治癒霊力を使い、軽傷者をさっさと治す。

その速さ正確さは、卯の花隊長に劣らないものだった（卯の花隊長本人曰く）

（重傷者の傷は、

両腕、肋骨、あばら骨、右足など10箇所骨折に、？度のやけどか。

一か所一か所治癒霊力でやるのは

ただの霊力の無駄ね。）

そして、懐からせいぜい20センチあるかないかの短刀 癒宇を取り出す。

「癒せ、“癒宇”」

弓親&やちる視点

s i d e やちる

とつてもやさしい光が、美月ちゃんのいるあたりから出たの。

花ちゃんとか呼ばないといけなかなと思った大けがの人を

あつという間になおしちゃうんだもん

さっちゃん（＝大道寺臯月）やゆうちゃん（＝神無月由宇）、うみちゃん（＝如月海依）と同じで斬魂刀が一本じゃないって噂で聞いてたけど本当だったんだあゝゝ

なんで 美月ちゃんは3席なんだろう？

side 弓親

最初に会った時の印象は、不思議なのほほんとしていて これです席なのか だった。

そのわりにおせっかいで面倒見がいいのか、11番隊のたまった山脈並の（どんだけ多いんだよ by 作者）書類の山の3分の2以上を1日で終わらせてしまった。

残りは、僕たちに指示してだけど

そのくせ、一角と勝負なんて身の程知らずだと思ったね

一瞬だけ・・・彼女の笑いが嘘に感じたけど

それは置いといて

でも、試合は僕の予想を超えていた

一角の攻撃を最小限の動きで避け、一瞬で一角の首筋に竹刀を当てた時は

強いそれに、なんてきれいに舞うように動くのだろう

とってしまったね。

まあ、僕には及ばないけど（ナルシスト）

その上、あの虚を倒すときの素早い動き

また今の治癒霊力

正直なんでこんな人が3席についているのだろうと思ったね

傷跡一つも残さず消し、一息ついていたら

やちるちゃんが、いきなり美月にいきなり飛び着いてきて

（もちろんちゃんとキャッチしたよ〜ん）

「美月ちゃんすっごーいーっ

なんで3席なんかにいるの？

それも、ひつつーのところぞ

うちに来てよ〜〜」

先ほどの十一番隊隊舎や書類を思い出し、

「いや、遠慮しときます。

戦闘も治癒も自信ありますけど）　おいおい）、必要以上に振りかざしたくないので

（面と向かって言うつもりないけど、
この人たちは尊敬してるんだし…私はつきりいって更木隊長みたいな人種嫌いだし、
まあ表には見せないけど

ああいう血に飢えた獣っていうのかしら？

無理。受け付けない

まあ、東仙隊長みたいにはつきり態度に出すつもりはないけど）

私平穩好きなんで。それに・・・」

ふと浮かぶのは、隊長の顔

ぶっきらぼうだけど、部下思いでやさしくて、

意外と素直なところもある隊長……

桃ちゃんといるときにズキツと痛む胸

はあ

認めざる得ないよね

私自身は初めてだけど、“私”は恋愛したことあるしね！

初対面だからとか通じないしもう、

どうやら最初から私一目ぼれしてたのねうん、自覚と同時に失恋
かあ、

私なんかにはもったいない人だし、桃ちゃんとお似合いだし、でも……

たとえ叶わなくても

「私は日番谷隊長のそばにいたいんです。」

その顔はまさに恋する乙女そのもののような感じで、

頬には少し紅さし、瞳は真剣。

恋した乙女はなお美しいというのが彼女の内面の美しさがにじみ出たような、少し儂いがとてもとてもきれいな微笑みだった。

それはどこかはかなさと切なさが含まれていたけど…

聞きにくいことをずばりと聞くのがお子様

「美月ちゃんって、ひつつんのこと好きなの〜〜?」

「(あまりに率直な疑問に思わず無言)

……はい」

「私美月ちゃんのこと応援してるからね!!!!!!」

のちに二人のやり取りを垣間見た一角さんという

(いや、あれどう見ても両思いだろうが、

鈍すぎだろ)

おまけ

「一角さんって、正解できるでしょ。」

実は私もなんです」

そばにいた弓親さんはあきれたように美月をみる。

「こんなところでそんなこと言ったら、そう隊長に知られる可能性が高くなるよ、あの四十六室に知れたら、無理にでも隊長になっちゃうよ」

「はーい（四十六室は面倒な存在なんだ。ふーん）」

番外編 現世の記憶（前書き）

美月の一方的卯月との再会です

これも時軸本編月の導きの4話と5話の間く

番外編

現世の記憶

「あの日番谷隊長、松本副隊長」

「「なんだ（何）？」」

「2人には現世での記憶ありますか？」

現世の記憶

「ないわねー」

「ねえよ

そもそも現世の記憶なんて完全に持つてるやつの方が少ない

ていうか少なくともお前ほどのやつ見たことねえよ

仮にあつたとしても、

何百、何十年も前のこと記憶にねえよ。」

現世での記憶を完全に持つものは少ない。

非常に濃密な記憶を持つあるいは何かの強い力を持つ者

あるいはその記憶を持ちたかつたか

まあ全くない者も少ないのだが

時と共に新たな記憶に埋もれていく

まして普通の人間の何倍もの寿命なのだ。

だから尸魂界に来たばかりの者は記憶を多く持つ。

まあ生きていても全て記憶を忘れないわけでもないしおかしくはない

隊長格は少なくとも過去2、30年変わっていない。

生きていたなら子供が親になるほど長い刻

(例をいうなら乱菊さんにいたっては100年前にはすでにこの尸魂界にいた)

死神は輪廻の輪に入らず

死ぬことにより生まれ変わる。

流魂街 の人は一定の時が過ぎると生まれ変わるのだが…

それはまた別の話し

まあそんな訳で覚えていられる方が不思議だ。

「で美月そんなこと聞くってことは何か話したいんだろ。

現世のこと」

彼は彼女の美月の少し聞いてほしい気持ちを察したのだ。

そして彼女は話す。

大切な思い出を

「

私は空座町に住んでいたの。

2人は知ってるかもだけど私の家は精霊術師の血受け継ぐ直系。

1000年以上前からね

精霊の力を借りて妖魔や虚を倒したり、半場虚化しかけた怨霊や整の浄化 - まあ尸魂界に送ってた。

でも、やっぱり腐っていくの。

少なくとも私の家、雛桜家はね

強大な力を持つが故にね。術師以外を見下し、傲慢になっていく。

どんなに頭がよくても

どんなに運動能力が高くても

どんなに精霊術以外の結界術や特殊術が出来ても

精霊術が使えなければ全て無駄。

しかも私の家が司る精霊術は炎　つまり炎術師の家系

この力は最も強い破壊力を持つだからこそ他系統の精霊術師まで見下してた。

元々それが私達の力って訳じゃないのに

しかも金や名誉に取り付かれて

庶民の依頼を断るのなんて日常茶飯事だった。

とくに古い考えの持ち主はね。

私のお父様は、頑なに名誉を守ろうとする古参に従ってたの

当主なのにな

多分それは得体のしれない母を後妻とした弱みに付け込まれてだらうけど

私は、古い考えのやつも

いいなりの父も

全てぶち壊したかったんだ。

父は、いうなら古参にとって傀儡にしやすい楽な当主、

そんな父が唯一言いなりにならなかったのが、母を妻にする事らし
いけどそれは置いといて

だってその概念のせいであの子は傷つけられたから

だから家から与えられる任務以外に

自主的にやってたの

そのうちの一つが、霊圧垂れ流しの友人に虚が近付かないようの処理

(なぜかやってなくても妙に避けてたけど……………)

それをあの子と

卯月としてたの。」

「卯月？」

それは誰だ？」

「雛桜 卯月。」

私の双子の妹です。

今もなお生きている……」

「美月の一族は死神も見えるんでしょ？」

どうしてあなた、会いに行こうとしないの？

それどころか、現世任務に極力行こうとしないでしょ。」

「だって……会えるっていつでも死神：死人としてだし、

私が死んだ日ね、隊長は知ってると思うけど私 一人だったでしよ
う？」

あの日は、卯月の都合で、私一人で虚をおびき寄せて、へました
んだけど

いつも背中合わせて戦ってるから後ろの注意怠っちゃたのよね。

2人であの日戦っていたら絶対私は死ななかった。少なくともあ
の時はね。

だから 今の私をあの子が見たらきつとショックを受けると思うの

よね。」

もしかしたら、それで記憶を取り戻しちゃったのかもしれない
それに 後を追ったかもしれない。

私は 怖い んだ

あの子のためとか言いながら、

過去の“私”の罪を思い出されるのが

しんだ彼女を見るのが、

そして逆にしんだ私と生きてる彼女の違いを実感するのが…

だって私は置いてきてしまったから

また

強いようで精神的に弱い彼女を

まあ 私も精神的に強いとは言えないけどね

だって私も“私”も置いていかれることへの絶望と辛さをよく知ってるから

「友人のため…か。」

他人のために死ぬのもお前らしいよな

でも、その友人のためにそれをやってたこと後悔してないんだろっ。

やさしいな おまえは「

違う ちがう チガウ

私は優しくなんかない

汚くて、醜くて 人間らしい人間だ。

嫌われるのが怖くて

過去を知られるの怖くて

他人を完全に信じることが怖くて

失うことが怖くて

一護のことだって私はただ、身近な人に死んでほしくなかっただけ

卯月が少しでも悲しむのを防ぎたかっただけ

一護のためじゃない

だって、結局私は卯月のいえ、自分のためだっただけ

そんなの私のエゴ

はつきりいって私は一護とは私あまり仲好くなかったし（幼馴染ではあるが、苦手だった。）

最後の3年くらい惰性だったし

だって 絶対私は、卯月と一護なら、たとえ一護が死ぬことになっても

卯月を真っ先に選ぶと思うから・・・

（ごめんなさい 私の中の美月さんはこんな感じで 朋と卯月至上主義です。）

朋&卯月 愛する人や自分が認めた仲間 越えられない壁 自

でも、彼女はこう思っています、他人が傷つくより自分が傷つくほうが良いと考えがちなので、やはり

やさしいですね by ヌエ)

「……優しくなんかありませんよ

私。だって 妹が卯月が悲しむほうが私はずっといやだから。

妹と友人なら絶対妹選んじゃいますし。」

「誰だって優先順位があるのは、心がある人間なら当然だろうが

人の心を考えられるその時点で冷たくなんかないだろう

それが誰かのためにせず自分のためだと言える時点で十分おまえは優しんだよ」

涙がでた

急いでそれを隠したけど

優しいのは隊長のほうだよ

私なんかまで優しく覆ってくれる

隊長には桃ちゃんがいるのに

勘違いしちゃうよ

「お前はもつとわがままに自分の気持ちに正直になったほうがいい
松本」

「はい。」

斎藤 4席い 少しの間私たち抜けるわ

仕事は終わらせた（ほぼ、美月と日番谷で）から

そつうちの隊の4席・斎藤 一に言い、

「よっぽどの指令じゃない限り呼ぶなよ（冷たい霊圧）」

一体全体何なんでしょう？

「行くぞ。 松本、雛桜。」

・
・
任務だ。」

仕事熱心な美月はなんの疑いもなしについていく

「はい」

松「はいいvv(確信犯)」

そして現世に向かった

ちゃんと十番隊担当区間だと信じて

もちろん限定印は押したよ、私はなしだけど

でも。降りたつたそこにあつたのは見覚えのある風景。

数か月では変わり映えのないそこは

「た、隊長う

ここ空座町じゃないですか〜」

「ここ十三番隊担当区域でしょ」

「だましたんですね」

「わたし帰ります」

穿界門へと引き返そうとした私をガシッとわしづかみするのは、乱菊さんだった。

「やっぱし、松本副隊長もグルですかあ~~~~!!」

「離せー」っていうふうにもがいているが全く力を入れていないし、本気で嫌がってもいない

「おとなしく 妹の特徴を教えなさい」

「うううう」

「はい」

（本当はだれかに無理矢理でも連れだしてほしかったんだ。

会いたい気持ちもホントウだから）

でもその前に行きたいところあるんですが・・・」

そこは・・・

私の 最期の場所

そして初めて日番谷隊長と出会った場所。

「ここで 死んだんだよね 私」

もう血の跡も、匂いも何もそこには残っていない。

戦った時の霊圧の痕跡さえ

そこに貼ってあったのは通り魔事件の張り紙

「私が虚に殺されたの、通り魔の仕業にしたんだ。

まあそれしかないよね」

哀愁に浸っていると懐かしい懐かしすぎる霊圧が1つと薄い薄い霊気が近くまで来たことが分かった。

「ちよっ 隠れて、霊圧消して」

慌てて私は隊長と乱菊さんの手を引き隠れた。

そこを通りかかったのは、すごい量の霊力を垂れ流しにするオレンジの髪の少年と

薄い薄い普通の人間レベルの霊気を漂わせる藍色の髪をポニーテールにした少女

だった。

「なんだ？この霊圧・・・」

垂れ流しすぎだろ」

そうなんだよね

はっきりに言ってあの霊力すごかった

本気でうざかった(黒)

それだけ蛇口が弱いんだよって思った

(すみません、一護の扱いひどくて、

だってあんまり好きじゃないんだもん

byユエ)

ていうか 年追うごとに増えてるし量

ていうか、感覚鈍ったかな？

卯月の霊力感じたん・・・あ

見間違うのも無理はない

嘘のように覇気がなく

生気が薄い 少女

(そっぴや、“私”が力ある世界で、“私”の方が早死にするの
初めてだっけ？

ここまで取り巻く雰囲気は変化するなんて・・・)

浮かべている微笑みはまぎれもなく、偽り嘘のもの

まあ、あまり彼女を知らない人間ならだませるうまい仮面

わかってる

さつき私が感覚が鈍ったかと思ったのは

信じたくなかったから

私の死がこんなにも彼女を変えてしまっているだなんて

その反面わかるにはわかるんだ。

だって逆でも同じことしたと思うし

改めて思うんだ

ごめんなさい 置いていってしまっ

てもよかった まだ記憶思い出してないね

あんな記憶なるべく遅く取り戻したいし

松「あの女の子。

目元とか霊圧の感じとか美月ににいていますね　もしかしてあの子？」

「…はい」

「美月が、双子の姉が死んでまだ2、3カ月だって言うのに、全然悲しんでいないじゃない（卯月さんの仮面はうまいです）」

憤るように言う乱菊さん。

私は、卯月が薄情だとは言われたくなくて乱菊さんの言葉を訂正しようとした

そのとき

「松本、悲しみを隠すのがうまいやつだっているんだ

見た目で判断するな」

大切な妹をかばってくれた

たとえその気がなくても

うれしかった

たとえそれが、彼の昔の記憶と照らし合わされて言われた言葉だとしても

一護と別れると、とたんに仮面が崩れた

「美月……」

美月

「ごめんなさい　ごめんなさい

私のせいだ

ねえ　本当にあなたの魂はもうどこにもないの？

虚に　食われてしまったの？

答えてよ

答えてよ　美月」

まさにそれは　悲しみの慟哭だった。

卯月の瞳からあふれ出る涙

必死に、私は　自分を抑えた

そうじゃないと飛び出して行きそうだったから

魂の双子の間には

生と死の 絶対的な壁があった。

だって 一緒に過ごすことはもうできないのだから

一通りなき終わると

「駄目だな
私

いつまでもイジイジしてそれこそ美月に叱られるよね。

死したものにこだわるな

とか

そんなに悲しいなら忘れて・・・とか

でもね美月。あなたは私の半身なの

たとえ 道が分かれてしまっても」

強がりだということは

分かった

わかってしまった

でも その言葉に励まされた気がした。

「いいのか？会わなくて」

「うん」

美月の瞳からも涙が次から次へと流れていた。

「美月がここにいないことは知ってる

でも、私はここと、あなたの眠る場所だけでは
弱い私でいさせてね

美月はなんでも抱え込むから、気をつけてよね」

卯月に拾われないような小さな声で言う

「それは 卯月もでしょ」

似すぎる二人の性格であった

「いつけない

今日仕事はないけど任務があったんだっけ

急げー あと5分」

相変わらず無理した表情ではあるが、

さっきよりはるかにすっきりした顔で

走って行った

すごく素早く

死神の瞬歩に劣らない

ちなみにふつうに帰ると、15分ほど

それに美月はついていく

「最初はいやだって言ってたくせにねえ」

「それはそれです

見ると

少しは成長してるか見たくなくて

（私という後ろ盾なしの家の反応も）「

そしてついて行ってたどり着いたのは

雛桜家の目の前

そこで私は待っていたが

揺れる卯月の霊圧で

何も この家は変わっていないのだとはっきりと自覚した。

しばらくするとまた卯月が出てきた。

持っていたカバンなどは手になく、代わりに肩下げのショルダーバックを付けている。

まあもちろん両手がふさがれないようにの処置なのだが、

美月は懸命に自分の気配を消す。

霊圧を無にし、存在感をゼロにする。

(ハンターで言う絶、である。)

そして卯月の後を追う。

どつちやら今日は比較的近場のようで、車ではない。

まあ、車を使うのは車で1時間の距離以上からぐらいであるが・・・

(遠っ)

夕闇がかったので、彼女は急ぐ。

あらゆる建物の上を飛び越し、走り、疾走し

ついたのはとある古い神社の前

「うわぁ

ひとけがないなこ

でも、TVでにぎわうような神仙疑うところより小さな祠とかのほづがよっぽど力持つ場合もあるしね

まあ、神様はいい意味でも悪い意味でも神様でしかないしね。

さってとここでよかったよね。

依頼状読んでなかったし、今読もうっん「

物陰からは

小声で

「おい、お前の妹抜けてないか？」

ふつう状況とかは把握してから来るだろ」

「あはははは、私がいた時は2人での任務だったから私が一回目を通してそれを卯月に簡単に伝えるって感じだったしねえ。」

でもさらに、ボケボケになった気が…」

読み終えた卯月は

「なんだ、ただの浄霊ジョウレイか。」

除霊でもいいらしいけど、こっちは簡単だけど問答無用の魂の消滅だしね

っ」

言葉を唐突に止めた卯月。

彼女の様子は気になるが少し話しておこう

除霊は、霊を取り除くことであるが、これは霊に関する配慮なしなので、その霊は魂を消滅するか大きな損傷を魂に受ける。

これをするのは、未熟な術者か、あまりに凝り固まった悪意の念が強い半場怨霊化したどうしようもない時である。

なお、霊子は残るのでそれは器子に変換するか、ソールサイテール尸魂界に送る。

まあ術者の種類によって（まあ言及はしないが）これしかできないときも多々あるが。

対する浄霊は、魂の穢れを浄化し、虚の場合は罪を洗い流しソールサイ尸魂界テイに送る。

では卯月に視点を戻そう。

「気のせいだと思いたい。」

浄霊のため、精霊の声に耳をすませる。

もし精霊の見える者がいたのならこの膨大な数を統べる彼女に驚くであろう。

数百数千数万、この世界の精霊は、五種類に分かれる。

炎 水 地 風 雷

そして、それを操るものを精霊術師という

たとえば、マグマなら、炎2に対し、地8のようになるし、水蒸気なら水9、空気1のような割合でその精霊が存在し、

この混合物はより強者が操れる。

例をあげるならば、マグマを同力量の地術師と炎術師が争えば、地術師に分があり

炎術師がそれを上回るなら、はるかに力量は上だということである。

ほかの話はとりあえず置いておいて

卯月が操る精霊は、水。

「げっ 虚が20ほど出てきそう。」

「ピーピーピー」

指令機が鳴り響く。

そして、その通りの虚が出現した。

「隊長、乱菊さん。」

大丈夫ですよ。

「私たちが相手しなくても」

そう美月は言う。

「なんだ、雑魚か。」

卯月は出現した虚を見ながらそう言いその手に一瞬して氷の矢を作り出す。

もちろんこれは精霊術である。

水術師の彼女にとって水や氷、雪、水蒸気

どれも操るのが容易なものである。

同じく氷の弓で、的確に矢を放ち命中させる。

もちろん狙うのは虚の頭。

自分に何一つ傷をつけず、土埃一つ体を汚さず、周りの神社などの建物や木々にまったく被害はない。

その間わずか、1、2分。

「いつまで倒れたふりしてんの？」

気配であんたが2体が合体した姿だったってわかってんのよ

下だったあんたは倒されて（死んで）ないでしょ

うまそうなその魂を喰わせろー！ー！ー！

グサッ

氷の矢はその頭と腹を貫く。

「悪いけど虚には手加減しないから」

瞳に冷たい怜悯な光を宿して彼女は言った。

.....

「美月の妹もなかなかやるじゃない」

「うん。」

「だけど、うちは、炎術師の一家だから
忌むべき突然変異だって言われてるのよね」

権力に固執し

力に固執し

傲慢に人を見下す最悪な人たち

血が繋がってるだけの他人と私はみなしている

そしてその考えに何も疑問を抱かず卯月を迫害してきた分家の
子供たち。

してこなかったのは明良だけかな。

私たちの一族は炎の熱さを知らない

ふつうの炎は効かないし、効くのは自分より上の炎術師の炎だけ。

だから、無邪気にひどいことを私がいないときにしていた

唯一の例外である卯月

水の力はわずか1年以上前に発現し覚醒した。

だからそれまで、無能者と言われ

炎で腕を焼き、

背中を焼き、

集団でリンチした。

あれは、いじめなんて軽いものじゃない

迫害よりも強い

殺人未遂だ

恐ろしかった

少しだけ

自分たちの無知の罪も知らないあの子たちが

血がつながっているだけで恐ろしく感じた

“私”のことを思い出す前だったからなおさら

思い出してから思うのは、哀れだと

ただそれだけだ

もう私にとってどうでもいいものだから

嫌いな相手に割く時間はもったいないと私は思う

卯月は行きと違いゆっくりと帰っていた。

まあ少しでも家に帰るのを遅らせたいのだろう

その帰り道。

「おいっ

馬芝中の雛桜 卯月だな」

ガラの悪い連中が、卯月を引きとめた

「そうだけど、何か用？大勢お揃いで」

そうすると口々に、男女入れ混ざっている

「あんたのせいで、うちの彼氏全治5カ月だったよ」

「俺の連れにずいぶんなことしてくれたな」

「私のところなんて後遺症が残るかもって」

e t c

「はいはい。」

うるさい

ていうかどれのことかわかんないんだけど

私は理由なしに手出ししたりしないよ

向こうから手え出したか、しつこかったからじゃないの？（美月が死んで喧嘩ばかりの時も理由なしにはしてないし）」

冷静かつ反省のかけらもなく、恐怖もない卯月に腹をすえかねているのか、

一気に卯月に襲いかかる。

ここからは一方的かつ一瞬だった。

一人ひとりの急所を的確につき

意識不明の重体もしくは、気絶状態にさせて行った。（微妙に男のほうが対処だひどいが、そこまで変わらない）

確実に過剰防衛

最後の一人のとき

気を失う前に

「さすが、？瞬殺の戦姫 ね。

ところでもう一人の？微笑の戦姫 はどうしたの？
最近うわさも「うるさい」グハッ」

卯月の雰囲気が変わった。

「あんだ達なんかその名を口にしてみろ

墮とすよ、下に」

鋭い殺気が一瞬放たれたのであった。

「おい、？瞬殺の戦姫 とか？微笑の戦姫
とかなんだ？」

もちろん隠れたままで、日番谷隊長が聞く

乱菊サンは今の卯月の動きに感心している。

「ああ、生きてた時の私と卯月の通り名みたいなもんかな。

しつこい男とか今みたいに容赦せずにはばいてたし

たしか、卯月のほうは、一瞬で笑いながら相手をKOするからで、

私のほうは笑いながらそれを眺めて弱いと狙えば返り討ちにあうから

らしいわ 戦姫ってほどじゃないと思うんだけど

「」（怒らせないようにしよう）「

そして私たちは帰って行った

side 卯月

今日放課後から妙な視線を感じた

気配もしないし気のせいかな

あんなこといったけど

本当はまだまだ立ち直れない

苦しい さみしい

そうしてもういない 半身を求めて泣くのがた

番外編 繰り返された悪夢（前書き）

美月のルキアとの出会いです

番外編 繰り返された悪夢

「やあ、美月ちゃんじゃないか？」

今度うちの隊に遊びに来なよ」

それがきっかけだった。

繰り返された悪夢

「ふ、ふ、ふーん」

機嫌良く走って行っているのは私こと雛桜 美月である。

浮竹隊長は、好感の持てる良い隊長だと私は思う。

まあ私を子ども扱いするところは少々気になるのだが、

部下思いで、他隊との連携もなんのその古株の隊長

いいよねえ

権力かさに着ているいろいろしてきた家の御歴々に比べたら
月とすっぽんだわ

考え事をしながら、走っていた

結構な速さで

だから、

「げっ 止まらない」

ドチーン

角から来る気配に減速を始めたが遅かった。

見事に激突

あー こんなの見られたら笑われそう

「っ (痛みになれても痛いもんは痛い)

大丈夫? ごめんなさい

「こちらこそ、済まぬ。そっちは平気か？」

ぶつかったのはぶきっぺらぼつな黒髪が綺麗な女の子だった。

紫がかつた瞳を瞬く。

「うん、へーきよ。」

あなた、そっちから来たってことは十三番隊隊員さん？」

「あ、ああそうだ。」

朽木 ルキアという

「浮竹隊長ってどこか知らない？」

知ってるなら案内・・・

「きゃーーーーー」

「！……」

突然、叫び声が聞こえた

始まる始まる

悪夢の再来が

その声はまだ続く

「虎徹三席 やめてください!!」

その声のもとに向かうと、一人の女性がその制止の声をかけた隊員に刀を振りかざした。

そして、振り下ろす。

誰もが、助けは間に合わない

斬られる。

そう考えたしかし、

それに反して肉を割く音はしなかった。

見ると、朱の髪の少女が、それを、背の自分の刀を抜き、攻撃を防いでいた。

(すいません 他者視点を混ぜました)

side ルキア

何かに操られたように、斬魄刀を隊員に振り下ろした虎徹三席。

でも、それを守ったのは先ほどの少女。

私は動けなかった

「虚に憑依されてるわね、こりゃ

前に見た物の怪憑きみたいだし」

そう少女が言った時思い出したのはあの時のこと

いつまでも降り続ける雨

死んだあの人を抱きしめる私。

魂と魂の融合

またなのかと、目の前が真っ暗になった。

「虎徹三席ってことは、十三番隊の異例の2人の三席の一人で、四番隊の虎徹副隊長の妹の、虎徹清音さん、よね

様子からして、憑依されて1〜2時間ってとこ？

肉体があるときでさえ、ああまで完全憑依されたら、短期間しか持たないって言うのに

（もっともこれは“私”の経験談だけど）

魂での憑依 いやこの場合融合？か

早くしないと自我が崩壊しちゃう……」

人間の自我はもろい

とくに悪しき意識により少しずつ少しずつ蝕まれる。

憑依状態が長く続くと、肉体の場合一つの体に2個の魂っていう不安定な状態なので体力が奪われる。

まあ、肉体があれば完全憑依は瞬時にできない分楽なんだけど。

ああああ

こんな時精霊術が使えたら、簡単なのに。

死んでるから使えない

虚の部分だけを焼き払うことが

また 欲しい

浄化の力が

『美月、美月。』

精神力を研ぎ澄ませる』

朱夏の声が頭に響いた

「（どっぴいっこと？）」

『我が契約者であり、超越者であるお主なら可能じゃ。』

我はここにお主の斬魄刀として存在しておく。

現世より負担は大きいがな』

- 超越者 -

- 契約者 -

懐かしい 言霊

超越者とはあらゆる次元において神に認められ力を借り受けることを認められたをさす。

その数は今この世界に片手しか存在していない

美月の生家、雛桜家ははるか1000年ほど昔、神獣・朱雀と契約した超越者の血を継ぐ家系である。

いやそれだけではない、ほかの4家、

水の神名家は、神獣・玄武との

地の大道寺家は、神獣・白虎との

雷の神無月家は、神獣・青龍との

風の如月家は、神獣・黄龍との

超越者の血を引く。

はるかなる昔

契約を結んだ超越者の名は薄汚れ伝わっていない。

だがしかし、数人だけが知っている

それを知るのはごくごく僅か

朱雀と永久の契約を結びし超越者

天照の血を色濃く受け継ぎ、帝の係累の娘

そのものの名を、安部あへのいや雛桜 美月と言った。

その名前も生まれも

今は本人たちだけが知ること

歴史の中に埋もれた存在

今、その5人の超越者が再び生まれたことも……

「（わかった、朱夏の言葉と自分の力信じるよ）
ふう」

精神の水面は波紋の広がりを止める

溢れでるのは言の霊

強き言霊は力と一つになる。

「我が守護精霊朱夏よ。」

この者と、この者の中にある悪しき虚…二つの魂を引き離し、
悪しき者を滅せよ

“炎よ散れ、朱夏”

いつも、始解したときに出る、朱い炎ではなく、その色は

黄金。

（一回卍解を試したことあるけど卍解は基本朱金色だったよ。）

淡い淡い青がかったそれは清音を覆った

-

-

-

「ば、バカ者!!」

何をしておるのだ!!」

「どづしたんだ?」

あわてたルキアちゃんの声と、

今来たばかりの浮竹隊長

大丈夫ですよ、とは無責任にすぐ言えなかった

たとえ信じていても

清音さんが倒れたと同時にその炎は消えた。

「虎徹三席っ」

殺す必要があつたんですか!?

簡単に仲間を殺して平気なんですか?!」

痛い言葉

それを紡いだのは、私が斬られるのを防いだ隊員。

私は清音さんの胸の上下してるのを遠目に確認し

「殺しませんよ

彼女に憑依した虚だけを焼き払ったの。

彼女の魂には何の影響もないはずよ」

急いで脈を確認する隊員。

ルキアちゃんが

「そんなことが・・・できるのか？」

「うん」

浮竹隊長は私に言った

「私の部下をありがとう」

その言葉で十分だと思った

「あの、あなたは誰なんですか？」

「ああ、そっぴや入ってまだ間もないし、

新入隊員他隊まで把握してないか

私は、

十番隊三席副官補佐の雛桜 美月。」

なぜか知っている浮竹隊長以外に驚かれた。

いち早く正気を取り戻したルキアちゃんが

「あのですか」

「あのってどんなうわさが流れてんの!!」
いわく

その1、仕事が早く正確

その2、斬魄刀と3本所持

その3、普段の霊圧は3割ほど。

その4、綺麗だが幼い

その5、斑目三席に完勝したらしい

1、3、5は許せるとして、幼いってなに!!!

一応出るといえるよ

ちよーっつと身長伸びるの遅かったから小さいけど

3も3割も出してないし

使って一割強だよ。

ああでも 今のは霊圧いつもの半分増しからい使ったかも

「ルキアちゃん。

敬語やめてね

私たち友達ですよ。

浮竹さん、お茶するん

「 いい度胸だな、雛桜。」

たいちよう

私の分終わらせましたよ。」

「お前、松本の逃亡補助しただろうが、

松本の分手伝ってもらうぜ」

「ルキアちゃん　またね（泣）」

うう、隊長の写真集に目がくらんでたし（おい）

もう二度と乱菊さんのお願いなんか聞くかー

- 強制終了 -

番外編 繰り返された悪夢（後書き）

始祖については、私のサイト内の少年陰陽師連載でわかるよう前世の彼らです。

そちらは亀並ですがぜひ読んでくださいな
ちゃんちゃん

ちなみに他オリジナルキャラの評判は

如月海依（二番隊副隊長）

・・・美しい男装の麗人。斬魄刀2本持ち、碎蜂隊長に認められる実力。

神無月 由宇（三番隊三席）

・・・市丸をたしめられる女傑、斬魄刀2本所持

大道寺 皐月（四番隊三席）

・・・第二の卯の花、腹黒、毒舌お嬢、斬魄刀2本所持

青木 輝（六番隊副隊長）

・・・なんでこの人が副隊長？、特に目立たないので実力を不審がられている

神代 魅（十二番隊三席）

・・・こいつのやっぱりマッドサイエンティスト？

須王 修宇（十一番隊四席）

・・・十一番隊だしやっぱり粗暴なのか？、

美月さんはうわさで判断するのが知らないのです。そういつの全然知りません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1849z/>

死神達の恋歌 ～月の導き～

2011年12月20日01時54分発行